

『文学部・人文学研究科ファクトブック I』

(強み・特色編)

1. 他大学・他学部にはない独自性 (強み) . . . P.1
2. 最近におけるその他の特記事項 . . . P.18
3. 地域貢献 . . . P.22
4. 各界・メディア等で活躍している教員・卒業生 . . . P.27

1. 他大学や他学部等にはない独自性（強み）

中世以来の伝統的なヨーロッパの大学は、文学・理学・神学・法学・医学という学部で構成されてきた。これらの学部のうち、後三者は、聖職者、法曹、医師という専門的な職業人を養成する役割を担う一方で、前二者は、基礎的な教育・研究の場の役割を果たしてきた。したがって、我が国においても、明治期にさかのぼる大学制度の発足以来、本来、広義の「文学」は人文の学として、自然の学としての「理学」との対比で理解されてきた。つまり、「文学」は、古典を始めとした文献を手掛かりとして人類の知の伝統を継承し、今に活かそうとする哲学、（狭義の）文学、歴史学の人文学、そして近年では、より実験的あるいは社会調査的な手法によって事象に近づこうとする心理学や社会学などの分野を包摂するものとして展開している。

今日の社会において、応用的な学問が重要であることは言うまでもないが、科学技術は、それ自身の進歩が人間や社会にとってどのような意味を有するのかということとは別の次元で、それ自体の論理によって進む側面がある。これに対して、「人間とは何か」、「社会とは何か」、「文化とは何か」という問いに答えようとする人文学（広義の文学）は、人間や社会のあり方そのものを根源的に考える役割を担っており、科学技術と人間・社会との関係を考察していくためにも、今日ますます存在の意義・重要性を増している。同時に人文学は、歴史あるいは他の社会を対象としつつ、そこから学ぶことを通じて自らの知見を高めるという性質を本質的に有しているので、グローバル化やそれに伴う価値の多様化の進む現代社会において、幅広い観点から物事をとらえていくためにも、人文学が存在することは必要であり、またその意義が認められる。

したがって、人文学研究科の基礎学部である文学部も、以上のような「人文の学」を実践する場として、新制神戸大学が発足したのとほぼ同時に創設された（ただし最初の4年間は文理学部）。そして、確かに旧制帝国大学＝7大学の文学部やその大学院に比べると歴史が新しく、かつ相対的に小規模ではあるものの、各学域（ディシプリン）において優れた教育研究を行い、かつ小規模性を生かして学域間が積極的に連携しながら、7大学に伍した教育研究の成果を生み出してきた。

たとえば、そのことは、人材養成の成果の面においても明確に示されている。つまり学部と大学院において、約60年にわたり様々な分野で活躍する卒業生を輩出してきたことである。例えば、後掲「4. 各界・メディア等で活躍している教員・卒業生（p.27-）」に示されるように、数多くの卒業生が学界、マスコミ界、産業界などにおいて重要な役割を果たしてきた（なお一覧表では、中高教員や公務員については原則として省略している）。またその中では、女性卒業生の活躍ぶりが注目されるという特色もある。たとえば、4期生である脇田晴子氏は大阪外国語大学、滋賀県立大学などを歴任した日本中世史の専門家であるが、その学術上の功績が認められて、文化功労者・文化勲章受章者となっている。また異色の経歴をもつ女性卒業生として、現在、野村ホールディングスの執行役員（グループ・インターナル・オーディット担当）を務める中川順子氏がいるなどしている。

このように優れた成果を上げてきた文学部・人文学研究科では、その入学者の学力水準が高いことも掲げておきたい。例えば、文学部の偏差値は、全国の国立大学の文学部系学部の中でも上位10位以内という高い位置をしめている（<http://daigaku.jyuden-goukaku.com/nyuushi-hensati-ranking/kokkouritu/jinbun.html>を参照）。

現在、人文学研究科はこれらの実績をふまえつつ独自性をもった展開を図っているが、以下では、それを人材養成（大学院・学部）、研究、そして社会貢献の3つの側面から示すこととする。

◆大学院における特色ある人材養成の実績と発展

大学院教育は昭和 43（1968）年における修士課程の設置をもって始まり、昭和 55（1980）年における文化科学研究科の設置によって博士後期課程教育にも参入するに至った。これは新制国立大学の文学部では最も早いスピードでの大学院設置である。そして平成 19（2007）年には、人文学研究科への改組によって、①博士課程前期課程・後期課程の一本化、②大学院部局化が実現し、今日に至っている。

現在の人文学研究科は、人文学の各学域の高次の専門性と総合性を発展させ、人文学の古典的な役割を継承しながら、同時に現代的な課題に対応する人材養成のための教育研究システムを構築することを目的としている。そのために研究科内には文化構造専攻と社会動態専攻の 2 専攻がおかれ、前者は古典的諸価値の分析による価値規範を創成する人材を養成し、後者はフィールドワークを重視して社会のダイナミクスを究明し、社会規範や文化形成に寄与する人材を養成することを目指している。

そして、この人材養成の実現のために、以下のように、競争的外部資金を意欲的に獲得しながら大学院教育の強化と充実を図っている。

まず、組織的な大学院教育改革推進プログラムに採択された「古典力と対話力を核とする人文学教育—学域横断的教育システムに基づくフュージョンプログラムの開発」（平成 20 年（2008）年度～平成 22（2010）年度）などによって、大学院教育の改革に積極的に取り組んできたことである。

ここでは、特に、基盤的素養としての「古典力」と、人文学の学術的融合を促進できる幅広い「対話力」の涵養を図るため、原理的研究とフィールドワークとを融合させた学域横断的な「人文学フュージョンプログラム」を開発し、またそれを同時に社会へのアウトリーチの試みと結合させることで、社会運営のさまざまな局面において専門性や総合的知識が要求される現代社会の中でリーダー的存在として活躍できる資質をもった若手人材を輩出できるよう教育改革を進めてきた。

こうした取組は、日本学術振興会・総合評価部会による事後評価において、極めて高い評価を得た。当該年度の評価対象の取組の中の人社系 25 件のうち、A ランクである「目的は十分に達成された」という評価は 2 件のみであったが、本取組はその一つに選ばれた（表、p.37 を参照のこと）。人社系、理工農系、医療系をすべて合わせた全 60 件の内で A ランクは 10 件であったので、人社系では、A ランクに評価されることはより困難であるといえる。また神戸大学人文学研究科の本事業は、同事後評価結果報告書において「特に波及効果が期待でき、他大学への参考となる取組」として特記され、次のように述べられている。

http://www.jsps.go.jp/j-daigakuin/10_jigohyouka/h20/jigohyoukakekka.pdf

「多彩な取組を通して、大学院生の自主的研究と社会的、国際的な活動の場を連動させることで、学生自身の研究成果を重視した従来のコースにはない大学院教育の可能性を提示している。…こうした取組により、支援期間前に比べて大学院生の自主的活動が活性化し、学会発表数や論文発表数が増加したこと、標準修業年限内での学位授与率が向上し、論文の質も高められたことなど、本教育プログラムによる成果は文科系大学院における大学院改革の一つのモデルとして、波及効果も期待されるものである」

（同事後評価報告書、p.10）

事業終了後のオフィシャルな評価に示されているように、本事業は、「従来にはない」いくつもの独自の優れた仕組みを制度化し、それらは他大学の人文学分野における大学院教育のモデルとなるものであつ

た。また、このように高い評価を受けた取り組みの成果を、プログラム期間終了後も大学院教育に還元する試みが現在続けられている。その一環として、全国の人文学分野の大学院に先駆けて設置された4つの研究科内共同組織の改編が図られているところである。

また、複数の研修プログラムの実施を通じて、**若手人文学研究者をグローバル人材として育成するシステムを整備してきた。**

これまでの取り組みとしては、日本学術振興会の **International Training Program**(略称 ITP)ならびに組織的若手研究者海外派遣プログラムを実施してきた。前者(日本学術振興会の ITP)は、平成 20 (2008) 年度から平成 24 (2012) 年度まで実施された。本プログラムは、現代東アジアが直面する政治外交・文化をめぐる諸問題の解決に向けて、東アジア相互の対話と共生を可能にするグランドデザインを設計できる若手研究者の育成を目的とし、実施以来延べ 44 名の派遣実績を積んできた (<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/itp/>を参照のこと)。アジア研究において現地語の研修のほかに英語の研修を課すプログラムは例がなく、アジア研究を複合的に進める上で大きな意味を持つプログラムである。また後者(組織的若手研究者海外派遣プログラム)は、平成 21 (2009) 年度から 24 (2012) 年度にかけて実施された。ITP の多極的教育研究プログラムを更に発展させ、フィールドワークや論文執筆、国際学会発表、公開講座や市民フォーラムの開催等、様々な教育研究活動の場となる「国際連携プラットフォーム」を構築し、東アジアの未来を担う、高度な研究能力と広い国際的視野を持った若手人文学研究者等の育成がその目的であった。ITP の海外パートナー機関である「コンソーシアム校」に加えてさらに7機関(北京外国語大学、華東師範大学、香港大学、ライデン大学、ヴェネツィア大学、ヤゲウォ大学、ハンブルク大学)を「リエゾン校」に指定し、より広範な人文学の諸分野へと若手研究者の海外研修を拡大した。たんなる海外学術研修の枠を越えて、海外日本語教育の人材育成の分野などで大きな成果を取めた。平成 21 (2009) 年度の実施以来、延べ 68 名の派遣を行ってきた (<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/soshiki-haken/>)。

なお、このような海外日本語教育の成果の前提として、人文学研究科の日本語日本文化教育インスティテュートが行ってきた「日本語日本文化教育プログラム」による日本語日本文化教育者の養成の実績がある。プログラム修了者数は毎年 10 名前後いる (<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/ijs/>を参照のこと)。

現在実施中の取り組みとしては、『問題発見型リーダーシップ』を発揮できる『グローバル人材育成推進事業』(タイプ B・平成 24 年度採択)がある。文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」は「若い世代の「内向き志向」を克服し、国際的な産業競争力の向上や国と国の絆の強化の基盤として、グローバルな舞台に積極的に挑戦し活躍できる「人財」の育成を図るため、大学教育のグローバル化を推進する取組を行う事業に対して、重点的に財政支援することを目的」(「日本学術振興会 HP」より抜粋)にしている。

採択された、神戸大学の事業では、文学部・人文学研究科、国際文化学部、発達科学部、法学部、経済学部・経済学研究科、経営学部の人文社会系 6 部局を取組部局として、「現実の社会に伏在する問題や課題を社会に先駆けて見出し、世界に発信しうる「問題発見型リーダーシップ」を発揮できる人材の育成を目的として、海外留学等を含む教育プログラムにより、深い教養と高度な専門性、グローバルな視野と卓越したコミュニケーション能力を備えた「問題発見型リーダーシップ」を発揮できる「グローバル人材」を育成する」(「構想調書」より抜粋)ための事業を展開している。

人文学研究科としては、人文学的課題をグローバルな視点から考察し、日本文化の深い理解を基に異文化との対話を重ねながら、現代社会における諸問題を解決に導いていくリーダーシップとコミュニケーション能力を持った人材を養成するプログラム・「グローバル人文学プログラム」を実施し、以下の5つの

能力を修得したグローバル人材の育成を目指している：1) 卓越した外国語能力、2) 優れたコミュニケーション能力、3) 主体性を発揮できる旺盛なチャレンジ精神、4) 異文化・日本文化への深い洞察力、5) 高度な国際感覚。

こうした人材を具体的に育成するため、神戸大学文学部・人文学研究科では主に二つの科目群を開講することにより、実践的かつ学問的な独自の教育体制を構築している。

・「グローバル人文学科目群」：人文学をグローバルな視点で学ぶことにより、高度な国際感覚を育成する外国語授業科目群。例「グローバル人文学特殊講義」「グローバル人文学演習」「比較日本社会論特殊講義」「比較日本文化産業論特殊講義」etc.

・「グローバル対話力育成科目群」：グローバル社会で活躍できる優れた外国語能力とコミュニケーション能力を育成する授業科目群。例「グローバル対話力演習」「グローバル英語力強化演習 I～II」(院・前期課程)「アカデミック・ライティング I～II」etc.

さらに、この間行ってきた若手人文学研究者のグローバル人材としての育成の新しい展開として、特に日本研究分野の若手研究者を育成するプログラムを開始した。具体的には、日本学術振興会・頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラムに採択され、平成 25 (2013) 年度から平成 27 (2015) 年度海外の各提携大学に神戸大学大学院人文学研究科から若手研究者を長期派遣して若手日本研究者の育成を行っている。

具体的には、世界の日本研究をリードする海外の 3 大学 (ヴェネツィア大学、オックスフォード大学、ハンブルク大学) との間でそれぞれ共同研究を立ち上げ、3 大学に若手研究者を 1 年間派遣して共同研究に従事させることによって、世界的な視野に立ち、世界における日本研究を自覚した新しいタイプの日本研究者を養成することを目的とする。共同研究のテーマは、ヴェネツィア大学は日本文学・現代日本社会文化論、オックスフォード大学は言語学・日本語学 (国語学)、ハンブルク大学は日本語教育学である。神戸大学がこれまでに 3 大学と築いてきた協力関係をさらに強化・発展させ、実質化することも目的である。

本事業の持つさらなるメリットは、ヨーロッパの日本研究の拠点 3 大学との間で頭脳循環につながる継続的で恒常的な学術交流関係を維持・発展させながら、3 大学が個別に有するネットワークを活用して、人文学研究科の国際ネットワークの拡充・強化を図ることができる点にある。

また、本事業によって派遣された若手研究者の経験が活かされて、次世代の研究者が育つという好循環が生み出されつつある。つまり、若手研究者は、国際共同研究に参加する機会を得るだけでなく、海外での研究継続や就職機会の可能性を広げることにもなり、異なる文化や学術的背景を持つ研究者を言語の壁を越えてまとめあげる力や、国際感覚および広い視野に立った思考力が鍛錬される。さらに全世界からの精鋭が集まる共同研究の場で互いに切磋琢磨することで、優秀な研究者との幅広い人脈ができるだろう。このように、長期の海外派遣によって自己をアピールする能力やリーダーシップを涵養して、将来日本で行われる国際共同研究を主導できる人材、あるいは幅広く社会に通用する人材として活躍することが期待される。

これらの実績や成果を継承・発展することにより、人文学研究科の目的にふさわしい人材を、前期課程 (修士) レベル、そして後期課程 (博士) レベルにおいて今後とも積極的に輩出することを目指している。また、そのために、新たな研究教育センター・インスティテュートの創設を行なうとともに、今後とも競争的外部資金の獲得などに積極的に取り組むことにしている。

◆学部教育を中心とするユニークな国際化

リサーチ・ユニバーシティの一部局として大学院教育に力を注ぐとともに、基礎となる学部教育においても現代にふさわしい人文学教育のあり方を積極的に模索してきた。そのために文学部は、平成13(2001)年度に改組を実施し、教育研究を通じて、科学技術・経済の発展に対する文化的教養の跛行性をただし、全社会的規模における文化的教養を再構築し、健全な社会人を養成することを目標に掲げている。現在はこの教育目標に基づきつつ、なおかつ改組後における社会の急速なグローバル化に対応すべく、以下のような取り組みを行っている。

＜「神戸オックスフォード日本学プログラム」の創設＞

文学部は、「現代世界で生起するさまざまな現象にも新鮮な関心を持ち、両者の相互参照を通じて新しい世界認識の基盤を構築することを目指す」という教育目的を達成し、教育のさらなる活性化を図るために、平成23(2011)年3月にオックスフォード大学東洋学部と学術交流協定「神戸オックスフォード日本学プログラム」(略称KOJSP=Kobe-Oxford Japanese Studies Program)を締結し、平成24年10月からオックスフォード大学東洋学部日本学科2年生12名の受け入れを開始し、1年間にわたって日本語科目と日本学を中心とする専門授業科目に参加させることになった。オックスフォード大学東洋学部日本学専攻は、イギリスまた世界における日本学の研究教育拠点の一つであり、日本国外における日本研究、さらに日本とイギリスの関係において重要な役割を果たす人材を育成することをその目的としている。本プログラムは、そこで学ぶ優秀な学生に対し、日本の大学としてその教育に共に携わるものである。以後このプログラムは毎年度(10月から翌年7月まで)オックスフォード大学東洋学部2年生の日本学専攻学生全12名に、日本語に関する授業のほか文学部で開講している専門科目の受講と単位認定が行われることになる。そのことを通じて、オックスフォード大学学生の日本学の知識と日本語能力を大きく向上させ、国際的な日本理解の基礎をつくることを目的とする。同時に、世界最高水準の教育機関であるオックスフォード大学の学生と日本人学生が神戸大学キャンパスで共に学ぶ環境をつくり、学習・生活両面での相互交流によって、文学部学生のより開かれたグローバルな視点の獲得と国際性の向上が期待される。

また、平成23(2011)年11月にオックスフォード大学ハートフォード・カレッジ(Hertford College)との間で学生交流に関する協定を締結し、これに基づいて、平成24(2012)年度から1名ずつの学生の受け入れ・送り出しを実施し、毎年それぞれの学生が1名ずつを交換留学生として1年間留学することができるようになっている。現在すでにハートフォード・カレッジと文学部の間で1名ずつの交換留学生を受け入れている。文学部・人文学研究科はすでに幾つかの海外の大学と交換留学生制度があるが、オックスフォード大学との学生交流協定は文学部・人文学研究科における学生教育の国際化の水準を飛躍的に高めるものと期待される。

受け入れと運営に関する詳細は以下の通りである。

・学術交流の担い手・目標

神戸大学側は文学部・大学院人文学研究科のアジア学・日本学を専攻する研究者・大学院生・学生が中心となる。オックスフォード大学側は東洋学部、ハートフォード・カレッジ、日産・日本文化インスティテュートが中心となる。

オックスフォード大学の日本学は、1964年に東洋学部の正規のコースとなって以来、1980年には日

産・日本文化インスティテュート現代日本研究所を傘下に加え、現在、活発に研究が行われている。ハートフォード・カレッジは、オックスフォード大学における日本学を推進するカレッジのひとつである。その創設は12世紀にまで遡り（カレッジ誕生は1740年）、トマス・ホップズ、ジョナサン・スウィフト、イーヴリン・ウォー等、錚々たる文化人を輩出してきた。

・これまでの経緯

2009年8月27日付で、オックスフォード大学東洋学部（Faculty of Oriental Studies）から神戸大学に、オックスフォード大学東洋学部日本学専攻のカリキュラム改正に伴う、学部生12名の1年間の日本留学につき、受け入れの可否の打診があった。

それを受けて、2009年9月から神戸大学は、学生受け入れに最もふさわしい部局として文学部を選び、受け入れ条件の検討を始めた。一方、オックスフォード大学はフレレスビック教授（Prof. Frellesvig）を神戸大学に派遣し、受け入れの詳細につき協議を始めた。

その結果、2010年2月オックスフォード大学は、神戸大学を含む日本の複数の大学が提示した受け入れ条件を比較検討したうえで、神戸大学への学生派遣の意向を伝えてきた。これを受けて、神戸大学文学部は2010年4月の教授会で、受け入れを正式に決定した。神戸大学とオックスフォード大学の間の学術交流協定は以下の3つからなる。

・「神戸大学とオックスフォード大学との間の学術交流協定」（神戸大学福田学長とオックスフォード大学長による）を、2011年3月2日に神戸大学ブリュッセル事務所で調印。

・「神戸大学文学部およびオックスフォード大学東洋学部における「神戸オックスフォード日本学プログラム」に関する協定」（両学部長による）を、2011年3月1日にオックスフォード大学で調印（日付は全学協定に合わせ同年3月2日付）。

・「神戸大学文学部・人文学研究科とオックスフォード大学ハートフォード・カレッジにおける学生交流に関する協定」（学部長とハートフォード・カレッジ学長による）を、2011年11月2日にオックスフォード大学ハートフォード・カレッジで調印。

・受け入れ体制と運営体制

平成24年度に、副研究科長（教育研究担当）・国際交流委員・カリキュラム委員・コーディネーター委員からなる「神戸オックスフォード日本学プログラム・アドバイザリーボード」が発足し、KOJSPの推進に当たっている。初年度は、円滑かつ適切な学生の受け入れやカリキュラムの実施に向けて、アドバイザリーボードがとりわけ重要な役割を果たした。現在、第3期生を受け入れている。KOJSPによる派遣学生は全員が寮で生活しながら神戸大学に通い、毎日、午前中は2コマの必修の日本語演習、午後は文学部の専門科目を自由に選択して受講している。学習・生活面でのサポートは文学部の各指導教員と学生チューターが担っている。水曜日の午後、学生ラウンジでインターナショナルアワーが行われ、オックスフォード大学の学生と日本人学生がコーヒーを片手に語り合い、交流の輪が広がっている。彼らは2年次（第3期生は平成26年10月～27年9月に相当）のみ神戸大学文学部で研鑽を積み、3年次以降は母校に戻り、卒業論文を準備することになる。平成27年10月には第4期生を受け入れる。本プログラムは適宜見直しを行う。

なお、本プログラムの実施に伴って、文学部とハートフォード・カレッジとの間に交換留学生制度が創設され、平成24～26年度に、毎年、学生をそれぞれ約1名、相互に派遣した。また、平成25～26年度には、ハートフォード・カレッジにおいて夏期英語講習が神戸大学文学部と共同で実施され、20名前後の神戸大学の学生がオックスフォード大学で学んだ。

こうした密接な連携のもとにある両学部を中心に、日本学に関するシンポジウムをはじめ様々な国際交流活動の展開が計画されており、平成24（2012）年11月7日（水）に開催したKOJSP日本学プログラムキックオフシンポジウムが、その最初の活動となった。また平成25（2013）年度については、10月15日、神戸オックスフォード大学日本学プログラム第2期開始を記念するシンポジウムとコンサートが瀧川学術交流記念館で開催された（http://www.kobe-u.ac.jp/topics/top/t2013_10_22_01.html）。学生の受け入れのみならず、教員同士も相互の大学で講演・集中講義等を行っている。それらを通して神戸大学文学部の海外学術交流ネットワークを充実させ、日本学の教育研究水準を飛躍的に向上させている。

以上のように、国外の大学の一専攻生全員を毎年度日本人学生と同じ場で学ばせ、学習・生活状況、成績認定等についても緊密な連携により行う事業は、国内の大学では他に事例がなく、神戸大学人文学研究科の極めて独自の試みである。このプログラムにより、研究面では人文学研究科の進める日本学研究に資するところが大きく、教育面では多文化が共生するグローバルキャンパスの実現という点で神戸大学の教育のみならず日本の大学教育に大きな示唆を与え、教育の質の向上に結びつくものである。

（資料は、p.40 神戸大学オックスフォードプログラムも参照のこと）



（ガイダンスの風景）



（学長を表敬訪問）



（インターナショナルアワーでの日本人学生との交流）





(留学生フォーラムでの発表)

<「グローバル人材育成事業」の開始>

オックスフォード大学などからの留学生の受け入れによる教育の国際化だけではなく、文学部（および人文学研究科前期課程）の学生を積極的に送り出す教育プログラムを平成 24（2012）年度より開始している。このプログラムは、平成 24（2012）年 9 月に文部科学省の事業として採択された神戸大学の人文社会系部局による「グローバル人材育成事業」の一翼をなすもので、平成 28（2016）年度まで継続することになっている。文学部・人文学研究科では、この事業を「グローバル人文学プログラム」という名称のもとで展開しており、①英語による授業を充実するとともに、②非英語圏を含めた海外の大学への学生の留学システムを大幅に改革する取組を行っている。また、その一環として、ネイティブの英語による人文学教育を行うことのできる教員（助教）を新たに採用して、より効果的なグローバル人材育成を実施している。

また、この事業の中で、平成 25（2013）年 9 月には日本学生支援機構の奨学金を獲得して、オックスフォード大学ハートフォード・カレッジの主催する夏季セミナーに、神戸大学文学部を中心とする学生約 20 名を派遣した。

<地域と連携した教育実践>

以上のような教育のグローバルな展開とともに、大学の立地する地域にしっかりと根を置いた教育実践を行っていることにも独自性がある。具体的には、以下のようなものである。

①文学部は、文部科学省「資質の高い教員養成推進プログラム」の採択を受けて、平成 18（2006）～9（2007）年度に地域文化を担う地歴科高校教員の養成」事業を実施した。これは、もともと文学部で展開していた地域歴史遺産保全・活用の取り組みを背景として始まったものである。高等学校地理歴史科の授業に、地域の地理・歴史を要素として組み込み、それを単なる「地域史」の枠内にとどめるのではなく、それを手がかりに日本や世界の歴史・地理を教えることができるような教員の養成を目的としている。さらに、教員自身が地域文化の担い手となり、また授業を受けた高校生が次代の地域文化の担い手となるような、教材研究と教育との循環システムの構築に資する教員養成も意図したものであった。

この事業の特色は、神戸大学に近接する県立高校（兵庫県立御影高等学校）の「総合的な学習の時間」と常時連携し、大学教員と高校教員が一体となって、教員を目指す学生の実践力の向上と、高校生の課題探求能力の向上との両立を図ろうとするところにある。大学附属学校との連携や、公立学校との短期の連携はよく見られる事例であるが、双方の教育目的を満たす公立学校との長期にわたる連携として、これは画

期的な取り組みであった。

事業終了後の平成 20（2008）年度から、文学部では「地歴科教育論 C」あるいは「地歴科教育論 D」等を毎年独自に開講し、県立高校と連携した授業の継続、発展を試みている。毎年前期に開講するこれらの授業では、受講生が数人のグループに分かれた高校生とともに、地域文化にかかわるテーマを設定し、それらについて高校生が行う調査・研究を大学生が指導することで、受講生の地域文化への理解と関心の促進と、実践的な指導力の涵養を図っている。なお、これらの授業は、大学院生（博士課程前期課程）も受講できるよう措置している。

さらに、「地歴科教育論 C」あるいは「地歴科教育論 D」の受講生の中で希望する者には、通常 4 年次に実施される教育実習とは別に、県立高校で日本史、世界史、地理の実習授業を行う機会を提供し、高校教員と大学教員とが連携して学生を指導する取り組みを行っている。

別表 地歴科教育論等受講生数

	学部学生	大学院生
平成26年度	22人	0人
平成25年度	23人	0人
平成24年度	18人	1人
平成23年度	9人	2人
平成22年度	15人	1人
平成21年度	23人	2人
平成20年度	15人	0人

御影高校との連携（これ以外に神戸大学で行う講義もある）

2010年度	会場	2011年度	会場	2012年度	会場	2013年度	会場	2014年度	会場
				4月17日		5月7日	御影高校	4月15日	神戸大学
		5月9日		日		日	御影高校	4月	神戸大学
		5月23日		5月8日		5月14日	御影高校	22日	御影高校
		日		5月15日		日	御影高校	5月13日	御影高校
		5月30日		日		5月28日	御影高校	5月	神戸大学
4月16日	御影高校	日	御影高校	5月29日	御影高校	日	御影高校	20日	御影高校
4月30日	御影高校	6月6日	御影高校	日	御影高校	6月4日	御影高校	7月	御影高校
5月14日	御影高校	6月13日	御影高校	6月5日	御影高校	6月11日	御影高校	6月3日	御影高校
5月28日	御影高校	日	御影高校	6月12日	御影高校	日	神戸大学	6月10日	御影高校
6月4日	御影高校	6月27日	御影高校	日	御影高校	6月18日	神戸大学	日	御影高校
6月11日	御影高校	日	御影高校	6月19日	御影高校	日	神戸大学	6月17日	神戸大学
6月25日	御影高校	7月11日	御影高校	日	御影高校	6月25日	御影高校	日	神戸大学
7月16日	御影高校	日	御影高校	6月26日	御影高校	日	御影高校	6月24日	御影高校
7月30日	神戸大学	7月21日	神戸大学	日	御影高校	7月22日	御影高校	日	
9月10日	御影高校	日	神戸大学	7月10日	御影高校	日		7月1日	
9月24日	神戸大学	7月26日	御影高校	日	御影高校	7月23日		7月8日	
11月12日	神戸大学	日	神戸大学	7月23日	御影高校	日		7月15日	
		8月24日		日	御影高校	7月30日		日	
		日		7月31日	御影高校	日		7月22日	
		9月5日		日		7月31日		日	
		9月12日		8月30日		日			
		日		日		9月3日			
				9月4日		9月10日			
				9月11日		日			
				日		9月17日			
						日			
地歴科教育論C		地歴科教育論D		地歴科教育論C		地歴科教育論D		地歴科教育論C	



②神戸大学では、発達科学部・文学部・経済学部が中心になって、学部レベルにおける ESD (Education for Sustainable Development) 教育を「ESD サブコース」として実施している。文学部は、このサブコースのために複数の授業科目を開講し、所定の授業科目を修得した学生には認定証を発行している。そして、このサブコースの教育では、講義だけではなく、アクション・リサーチの実施が重視されているので、地域をフィールドとし、地域と連携した教育を重視している。文学部のアクション・リサーチ型授業では、阪神間で多発しているアスベスト問題に特に注目し、それを授業テーマの中に取り込みながら教育実践を行ってきた。具体的には、地域のアスベスト問題の現地調査、そして関係者との交流を行いながら、環境問題に対する認識を ESD の立場から深めている。このアスベスト問題に関しては、平成 25 (2013) 年度 11 月 23 日に人文学研究科主催による学術講演会「アスベスト問題の現在—社会と医療」を実施した。この教育は持続可能な社会の担い手となる人材養成に積極的に取り組むことによって、文学部の改組時に明記された教育目標に十分に適合したものとなっている。

<今後の展開>

「神戸オックスフォード日本学プログラム」を息の長い教育プログラムとして定着させることを通じて、文学部・人文学研究科における日本研究そして日本学教育の一層の質的向上や国際化を図ることを目指す。その中で、文学部・人文学研究科が、海外にある日本(語)学科・専攻の教員や学生にとって特別に魅力のある存在となり、世界の中で存在価値を高めるように努力したい。その一環として、部局内に設置されている「日本語日本文化教育インスティテュート」を含めて、日本社会や日本文化の教育研究の組織・機能を拡充する。

また、留学生受け入れのプログラムと海外への学生派遣のプログラムを有効に結びつけて、日本人学生自身の国際化に対する意識を高めて、国際的な人材養成を一層促進する。そのために海外の大学との連携を強化する。

同時に、教員養成や ESD 教育における地域との結びつきに見られるように、日本社会、とりわけ地域と積極的に連携したり、関わったりしながらの教育を行うことを重視して、世界的課題にも地域的課題にも十分に対応できる、バランスのとれた人材養成を行う。

◆各学域における研究の深化と、学域を越えた連携の開拓

人文学研究科は 15 の教育研究分野からなり、それぞれが固有の学域（ディシプリン）を形成している。そして学域ごとに、文学部創設当初より優れた研究がなされてきたが、近年においてもその伝統を引き継いで、高い水準の研究が現職の教員によって展開されている。その成果の一端は、本研究科ホームページの以下の箇所にも公開されているところである。

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/activities/books.html> （「最近の著作から」）

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/faculty/index.html> （「人文学研究科 各教育研究分野へのリンク」）

同時に、各学域は孤立したり、タコソボ化したりするのではなく、相互に連携しながら、人文学の学術的課題や現代社会的な課題に十分に答えられるよう取り組んでおり、その実践の場として、海港都市研究センター、倫理創成プロジェクトなどが部局内に設置されている。そして、これらセンターやプロジェクトでの研究は大学院共通授業科目（前期課程：「海港都市研究交流演習」「倫理創成論演習」など、後期課程：「海港都市研究交流企画演習」「倫理創成論発展演習」）と結びつけられることによって、研究と教育などの一体的な展開が図られている。

＜相互連携による学域を越えた研究の先進的開拓＞

第一に、神戸という魅力あるフィールドを学域横断的に解明するとともに、アジアの他の国・地域との海港都市との比較研究を推進するために平成 17（2005）年度に海港都市研究センターを設置して、海外研究者とのネットワークを形成しながら、研究を推進してきた。

その目的は、「神戸のように海に面する港湾を持ち、国家の枠組みに留まらない文化の交流と定着を進めてきた都市を「海港都市」と捉え、特に東アジアにおける人と文化の出会いと交流、対立と理解の仕方、そして新しい文化創造の可能性を改めて検討し、国民意識の分断的な壁を乗り越えて、緩やかな公共空間を構築していく条件とプロセスを解明することにある」。その活動としては、以下のとおりである。

①海港都市国際学術シンポジウム：「海港都市」にまつわる諸問題を多角的に考察するため、アジア圏の研究者が国境や専門分野を超えて意見交換を行い、大学院生同士の研究交流をも目的とする国際学術シンポジウムは、毎年、連携する 4 カ国（韓国・中国・台湾・日本）の輪番で開催し、平成 25 年（2013 年）12 年 20～22 日の中山大学で 9 回目を数え、「近代以来アジアの移民と海洋社会」をテーマとし、教員 2 名、学術推進研究員 1 名、大学院生 1 名が参加（内教員 1 名、学術推進研究員 1 名が報告）した本学に加え、台湾大学（台湾）・韓国海洋大学校・木浦大学など多くの大学から参加があった。

②海港都市研究会：平成 23（2011）年度より「海港都市研究会」として、本研究科の博士号取得者や海外の研究者が研究内容を報告して、教員や大学院生らと意見交換を行う場を設けている。特に平成 23（2011）年度は、Mark Harrison（オックスフォード大学・ウェルカム医学史研究所・教授）の報告も得て好評であった。

③海港都市関係資料のデジタルデータ化：例えば、附属図書館所蔵の「神戸開港文書」は、開港期神戸の行政記録であり、古文書と英文が混在する特徴を有し、未整理史料の整理が終わりつつあり、今後の整理や活用の方向性を探っている。

④海外の大学等との連携をさらに拡大：たとえば、韓国海洋大学校を中心に世界海洋文化研究所協議会（略称 WCMCI）が結成され、第 2 回のシンポジウムが同大学で平成 24（2012）年 6 月に開催され、海

港都市研究センターも参加した。神戸大学大学院人文学研究科とオックスフォード大学ハートフォード・カレッジとの間で締結された学術交流協定とも連動させ、同大学内で設立準備中のグローバルヒストリーセンターとも交流を深めることが確認されている。

なお、これまでのセンターの共同研究等を通じて、以下の写真のような著書が出版されている。



第二に、グローバル化時代における科学技術と倫理の関係を解明するために、倫理創成プロジェクトを実施してきた。このプロジェクトは、「倫理創成論講座」（文化科学研究科）を継承するものとして、平成19年度の人文学研究科への改組とともに始まった。このプロジェクトは、人文学における先端的学際研究、「知識基盤社会に相応しい大学院教育」、すなわちグローバル化と科学技術時代が求める新しい倫理規範の可能性を学際的に探求する、現代日本にふさわしい教育・研究を行い、この課題に応えうる人材の育成を目指している。特に、生命・医療倫理、工業・環境倫理あるいはグローバル化の中での宗教やマイノリティの問題を含む多文化共生の倫理に関する教育と研究を行ってきた。神戸大学の他部局、国内外の他大学・他機関の研究者、NPOや市民活動家、ジャーナリストなど、文理の枠を超えて連携協力して教育と研究を推進している。また、その研究成果も含め、関連する論題に関する研究論文を、若手研究者を中心に広く公募し、査読の上、掲載するかたちで、平成19年（2007年）から毎年度、研究紀要『21世紀倫理創成研究』を公刊し、2014年度末に第8号を刊行した。このような幅広い活動から、以下のような他大学には見られない教育研究のユニークな成果を生み出している。

①国際的な展開：内外の研究者を招聘した倫理創成研究会は平成17（2005）年から現在まで55回を超え、国内だけでなく、アメリカ、フランス、ドイツ、チリ、アイルランド、韓国、香港などの研究者を招聘した学際的な研究機会を提供してきた。また、このプロジェクトでは、近年特に、東アジア地域との交流を進め、国立台湾大学、大連理工大学と連携し、韓国、香港などの研究者も交え、毎年一度、英語を発表言語に大学院生、若手研究者の発表を中心にした Applied Ethics and Applied Philosophy in East Asia を開催している。その内容は、工学倫理、生命医療倫理、環境倫理、ジェンダー、情報倫理および応用倫理学の基礎に及び、平成22（2010）年に神戸大学で第1回を開催し、その成果を英語の計19編（うち神戸大学の大学院生と教員は5編）の論文からなる論文集を公刊した。その後、平成23（2011）年は大連理工大学、平成24（2012）年は国立台湾大学、平成25年（2013年）は、神戸大学で開催し、平成26年（2014年）は大連理工大学で開催予定である。このような国際会議の継続的实施による研究交流は、この分野では我が

国の他大学にない特色となっている。

②社会貢献:プロジェクトの立ち上げ以降、自治体や神戸所在の国連機関などと連携し、「防災文化の創成」、「持続可能な社会と防災文化の普及」などの一般公開シンポジウムあるいは NPO と協力したアスベスト問題関連の企画を行う中で、平成 18 (2006) 年以来、阪神地区を中心に大きな問題になっているアスベスト被害・リスクに関する人文学の観点からの教育・研究を様々な形で行ってきた。その取り組みは、他大学には見られない、地域の市民や内外の研究者、NPO などと連携した研究や社会活動として、文学部の ESD の取り組みが外部資金(カシオ科学振興財団平成 21 (2009) 年度「環境人文学の構築——持続可能な社会実現に寄与する人文学分野の人材養成を目指して」1000 千円)を与えられたように、高い評価を受けている。

① 科学技術のリスクと倫理に関する研究教育

こうした研究のなかでとりわけ研究教育が進展したのはアスベスト問題と核と放射能リスクの問題である。

アスベスト問題へのアプローチ:平成 20 (2008) 年度から平成 22 (2010) 年度の3年間、倫理創成プロジェクトの教員と院生を核として、学術振興会とフランス ANR が支援する、国際的・学際的な共同研究『日仏二社会の珪肺・アスベスト疾患—空間的マッピングと人文学的研究—』(計 6000 千円)を行い、神戸大学とパリ (L'Ecole des Hautes Etudes en Science Sociales および Institut d' Etudes Politiques) で各 3 回の会議を行った。その研究成果は、疫学の国際会議 (EPICOH-Medicem 2010 Occupational Health under Globalization and New Technology, Taipei, Taiwan Veteran General Hospital, 平成 22 (2010) 年 4 月に How to make good epidemiology with wrong numbers? A multidisciplinary approach of silicosis and asbestos related diseases in France and Japan のセッション) で共同発表したほか、神戸大学の平成 23 (2011) 年 6 月の会議などでフランスの研究者と共同して発表した。このような共同研究は我が国では極めて希である。

そして、平成 24 (2012) 年 7 月には、一連の教育研究の成果のアウトリーチとして、京都精華大学大学院マンガ研究科と共同制作してきた、アスベスト被害に関するマンガ『石の綿 マンガで読むアスベスト問題』(かもがわ出版)を公刊した。このような試みは、我が国で初めてとも言えるものであるが、本書は、新聞、テレビニュースでも報道されるなど、社会的な反響も大きかった。また、制作に協力した NPO により、同年 10 月にはパリ (<http://andeva.fr/?Programme-de-la-Journee>) の国際会議、11 月にはタイ・バンコクの国際会議で紹介された。また、東日本大震災以降、神戸大学の「東北大学等との連携による震災復興支援災害科学研究推進活動サポート経費」を受け、平成 24 年は、住民参加による被災地のアスベスト飛散調査への参加・協力を NPO 団体と協力して実施し、平成 25 年は、この調査研究と上記のマンガ制作の経験をもとに震災時のアスベストリスクに関する、市民向けの啓発ブックレットを作成中である。

核と放射能の問題へのアプローチ:長年、核兵器や劣化ウラン弾の国際的廃絶運動や放射能問題に関わり、関連諸分野の研究者やジャーナリストと共同で出版した『ウラン兵器なき世界をめざして——ICBUW の挑戦』(合同出版、2008)、『終わらないイラク戦争 フクシマから問い直す』(勉誠出版、2013)、『劣化ウラン弾——軍事利用される放射性廃棄物』(岩波書店、2013)などの活動により「科学技術社会論・柿内賢信記念賞実践賞」(2012)を受賞した教員が中心になり、平成 23 (2011) 年度から「神戸オックスフォード日本学プログラム」の一環として広島でのフィールド学習「Discover Hiroshima」(2泊3日)を企画・

実施している。本研究科の留学生・日本人学生が現地の NPO 関係者や大学生たちと意見交換する「バイリンガル国際ワークショップ」を柱としたこの問題発見型プログラムの試みは、参加者から大変高い評価を得ており、今後のさらなる充実・展開を目指している。

<今後の展開>

研究大学としての神戸大学の一翼を担うべく、特色ある研究の一層の展開を図る。そのためには各学域における研究をさらに深化させ、その成果をもとに、学術の発展と、現代社会の展開のなかで、新たに必要となる研究領域を学域の横断的連携にもとづいて開拓する。それによって人文学研究科の学術領域における役割、そして社会における役割という両面を積極的に果たす。

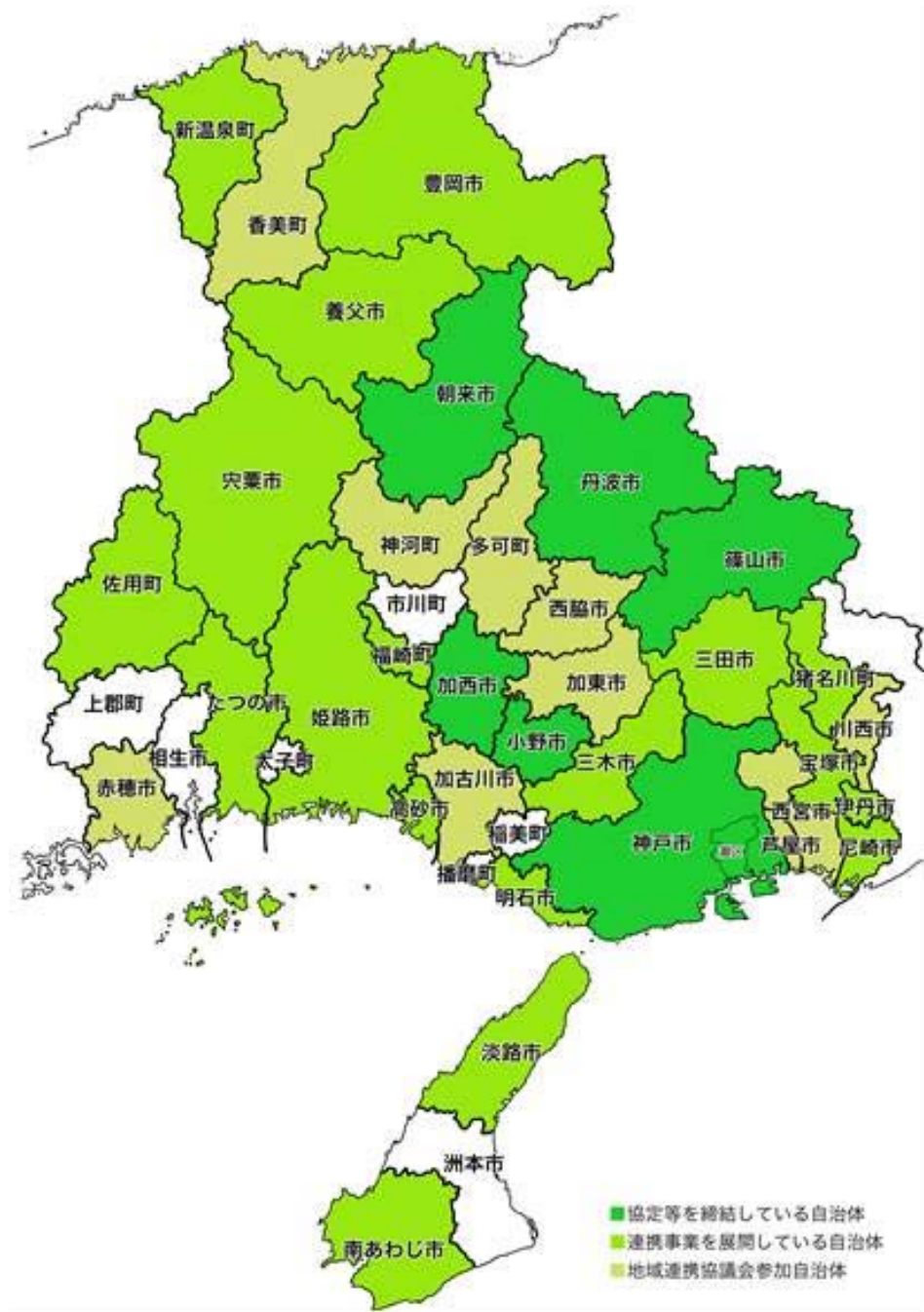


◆社会連携の核としての「地域連携センター」の展開

人文化研究科の地域連携センター（平成 14(2002)年度設置）は、阪神・淡路大震災以来、本研究科の自治体等との地域歴史文化支援事業を発展させてきたという経緯がある。事業内容としては、地域社会の再生に向け、地域社会の基礎である地域の歴史文化を維持発展させるため、大学の知を地域に還元しながら、地域社会の研究を深め、そこから新たな知を引き出す取り組みであり、日本の大学の中で初めての体系的・持続的な取り組みとして高い評価を受けている。大規模自然災害時の地域の歴史文化遺産の保全や地域歴史文化の復興のための全国的モデルとして、国連防災世界会議（平成 17（2005）年）の報告等で注目された。また危機に瀕する我が国の地域文化の維持・再生に向けた、文化庁の文化財サポーターフォーラム（平成 20（2008）年）では、地域歴史文化支援についての国立大学唯一のモデルとして、その取り組みが報告された（<http://www.kuba.co.jp/bunkazai-supporter/>）。

同センターの持続的な活動の中で兵庫県内の自治体等との連携は拡大し、関係自治体や地域団体は、あわせて 30 を越え、ほぼ全県下にまたがっている。自治体史の共同編纂、歴史資料の調査研究にも基づく展示会、地域の歴史文化を担う住民リーダー育成のための講座など、地域歴史文化に係る連携事業や共同研究を広く展開している（地図 p.16 を参照のこと）。地域の歴史文化を担うリーダーとなりうる幅広い人材育成のための学生教育に力を入れ、平成 16（2004）年度現代 GP「地域歴史遺産の活用を図る地域

リーダー養成」は文・工学部を中心に学部学生レベルのカリキュラムを、17（2005）年度大学院教育 GP 「国際交流と地域連携を結合した人文学教育」では、大学院レベルの専門家養成カリキュラムを開発、実施した。すでに述べた平成 18（2006）年度教員養成 GP 「地域文化を担う地歴科高校教員の養成」では、博物館、高校、大学の三者の連携を活かし高校教員養成システムを開発、実施、さらに、同じくすでに述べた平成 20（2012）年度に始まった大学院教育改革支援プログラムでは、地域でのリーディング機能強化カリキュラムを開発、実施した（表、p.17 を参照のこと）。



これらの事業の成果は、その後、文学部および人文学研究科の正式科目として採用され、平成 18 (2006) 年からは学部レベルでの基礎的な講義として「地域歴史遺産保全活用基礎論 A・B」、県内の連携自治体と共同した取り組みとして実地で、歴史遺産の保存活用を学ぶ「地域歴史遺産保全活用演習」、さらに大学院のカリキュラムとして大学院生が自治体、地域住民と連携して地域歴史遺産の活用を企画、実施する「同企画演習」が行われている。またすでに述べた県立御影高校と連携による「地歴科教育論」などもある(地歴科教育論等受講者数については、表、p.9 を参照のこと)。

また平成 22 (2010) 年度から 3 カ年の特別経費で県内の自治体とコンソーシアムを形成し、①地域歴史文化を担う人材育成事業、②全県的な歴史資料群データベースの整備、③事業を支えるファンドの確立を目指す、「地域リーダーの地域歴史文化育成能力を強化する地域歴史文化育成プログラム」の開発に乗りだし、兵庫県の支援のもと、それを県内各自治体で試行した。これにより地域歴史遺産の地域住民・研究者の利用を図るために、各自治体における地域歴史遺産(特に歴史資料)の所在把握状況の調査を進め、また、パイロット事業として兵庫県の基礎的地域資料である『神戸又新日報』のデジタル化およびその公開を行った。さらに、歴史資料情報基盤システム形成事業を展開している。これらの事業は、災害に備えた地域歴史遺産保全のための基礎情報となっている。

なお地域連携センターの活動の中から、以下の写真のような図書が刊行されている。



さらに、センターの成果を全国に発信し大学間連携を強化するために、平成 22 (2010) 年度に地域歴史文化に関する国公立大学フォーラムを 22 大学の参加を得て開催し、地域文化大学連絡会を結成した。また東北大学との災害分野での協定を生かし、阪神・淡路大震災での経験を東北大学に伝え、連携し、東日本大震災での歴史遺産保全の取り組みを進めている。

(関連資料は、[資料 p.45 地域連携](#)を参照のこと)

2. 最近におけるその他の特記事項

■地域歴史文化育成支援拠点の整備

人文学研究科の地域歴史文化の研究とその育成のための地域連携事業は、我が国の大学で初めての体系的・持続的な取り組みであり、地域再生を目指す兵庫県内の自治体や地域住民から期待されるとともに、全国的にも大学のこの分野での地域連携のモデルになってきた。さらに大規模自然災害が続発する日本列島において、地域歴史文化の基礎である文化遺産を守り、そこでの地域での災害の記憶を伝えていくことは、減災・防災の観点からも喫緊の課題となっている。

このような取り組みをいっそう充実させ、全国に発信していくものとして、この取り組みの重要性と本研究科がこの分野において日本の研究をリードしてきたことが認められ、人文系においては、採択されることが稀である文部科学省が支援する「特別経費・プロジェクト」に採択され、「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」プロジェクトを平成22(2010)年度～平成24(2012)年度まで実施した。

以下の新聞記事が示すように、本事業を中心とする取り組みは社会的にも大いに注目を集めた。

The image shows a collage of newspaper clippings from '日本経済新聞' (2012年10月6日). The main article is titled '文化' and discusses the importance of local history and culture in disaster recovery. Other articles include '歴史・文化研究 大学と住民協力' (History and Culture Research: University and Resident Cooperation), '文化住来' (Cultural Heritage), and '交遊抄' (Exchange Notes). There are also photos of people engaged in research or community activities.

(日本経済新聞 2012年10月6日)

■日本のサブカルチャー研究のための拠点構築

文部科学省が推進する「国際共同に基づく日本研究推進事業」に採択され、平成 22（2010）年度～24 平成（2012）年度まで、「日本サブカルチャー研究の世界的展開－学術的深化と戦略的な成果発信－」事業を実施した（<http://www.japan-subculture.com/concept.html>）。

本事業は、現代日本の先端的な文化、ポピュラー文化の面での調査研究の深化を目的としている。マンガやアニメが諸外国で大きな存在感を持つことはよく知られおり、パリの「ジャパン・エキスポ」には毎年 16 万人以上が集まり、同様のイベントは、ルッカ（イタリア）、ロサンジェルス、香港、台北、杭州（中国）、シンガポールなど枚挙に暇がない。杭州の場合には公式発表で 160 万人が訪れたとされている。諸外国世界の日本研究は、伝統的に、日本語や古典文学、日本思想や歴史などの分野で偉大な功績を残してきた。しかしそれに加えて今日、以上のような領域での研究の深化が求められている。

言い換えれば、現象それ自体のこのような存在感に比して、この領域に対する真面目な学問研究は立ち遅れている。政府機関やソフトパワー論に基づく注目も一部から集め、マスコミの話題にもなっている。しかし、それは必ずしも日常的な学問的営為と結びつき、これまでの日本研究の蓄積に根を張った形で展開してきているわけではない。その間、諸外国ではそうした発展が見られるのである。中国では、ほとんどすべての重点大学（例えば、北京大学、清華大学、復旦大学など）に、現代のポピュラー文化を含む文化産業に関する研究組織が設立されて久しい。英国は文化産業研究の先進国である。

本事業の基本的趣旨は、従って、この分野の「学術としての深化」にあり、それは日本の学術研究の世界展開に資すると共に、諸外国世界における日本研究の再活性化にもつながるものと考えられる。この「学術としての深化」には、1. 学際性、2. 実証性、の 2 つの柱がある。

また、こうしたプロジェクトを進展させるためには、芸術学、表象論、社会学、哲学、歴史学、人類学、メディア論、文学研究などの諸領域の学際的な協同を視野に入れる必要がある。さらに、質問紙調査法によるサーヴェイやインタビューを含む一定規模以上の実証的調査研究の必要性もあり、これは少なくとも大規模な社会科学の手法ではこれまで行われてきていないものである。

本事業では上記の目的を達成するため、既にこれまでに 1. パリの政治学院を中心とした「ヨーロッパ・マンガネットワーク」等海外研究組織との調査データの共有、2. 日本での大規模な（グローバル・レベルの）国際学会の開催、3. アジアでの独自調査、などを実施してきており、その成果の一部は既に上記の国際会議で発表し、本事業の HP で公表すると共に、順次他の媒体でも発表していくこととしている。

以下の新聞記事のように、本事業はマスコミにおいても広く紹介されている。

日本のサブカルチャー 中国へ

日本のサブカルチャーはどこへ行くのか。欧米へ、という話がよく耳にする。では、足元のアジアへはどうか。

去る9月2日、神戸大学は北京において、北京外国語大学との共催で「日本サブカルチャー」（日本のマンガやアニメ）についてのシンポジウムを開催した。北京外大はじめ、北京大学、香港大学など中国および日本から7人の第一



油井 清光

ゆい・きよみつ
神戸大学大学院
人文学研究科教授。日本サブカルチャー研究会代表。昭和28年、神戸市生まれ。ハーバード大学客員研究員などを経て現職。著書に『リスク化する日本社会』（共著、岩波書店）など。

加速する文化的「交配」

れた調査結果とも比較検討する予定。

別会場で行われていたコスプレイベントの参加者にもインタビュースタッフが取材して、私たちが逆に見たいという受け、その模様は地元テレビ局が取材して、私たちが逆に見たいという受け、その模様は地元テレビ局で直ちに放映された。あのコスプレ参加者たちの、没入の深さとエネルギーはどこから来るのか。それはいまだかつて、誰も納得できるような説明できていない、しかしはっきりとした世界の社会現象、大量現象である。

杭州の地元テレビ局は、このイ

アニメ好きの若者たちで盛り上がった「中国国際動漫展」
—中国浙江省杭州市

線の日本研究者が参加した。私は「日本サブカルチャー研究会」の代表として、このシンポジウムの組織にあたり、報告者の一人をつとめた。

新学期早々で、機内は人影まばらであったにもかかわらず、キャンパス内の大きな国際会議場には学生たちがつめかけ熱気で満たされた。その大多数が女子学生であった。このことにもあらためて驚かされた。

いま、テレビや映画、DVD、ダウンロードなどで見られるアニメーションの生産量（作品の時間数で計る）で世界一の国はどこか。中国である。中国の国内アニメ市場は、約1兆5千億円、関連するキャラクター・ビジネスを含めればその総額約3兆2250億円は、もちろん日本をはるかにしの



今年5月末、中国最大規模のアニメ・マンガのイベント「中国国際動漫展」が浙江省杭州市であり、現地を調査した。昨年度の発表では延べ約160万人が参加したというところであった（警見のおよび限り、この数字は世界の同種イベント中「もちろん」最大である）。

杭州調査では、用意していた200通のアンケート票がすぐになさばけ、みなその記入作業に没頭してくれ、あっとい間に回収できた（香港で行った同様の調査とも合わせて分析し、欧州で既に行わ

グローバル化する文化的生産物の発信源は、近代世界ではほぼ欧米に独占されていたが、それはいまや少なくとも相対化され、発信源の多元化が起こっている。同時に、それらはすでにどうしようもなく相互に影響しあい、いわば「交配」しつつある。

このプロセスの中でこそ、しかし創造性やパワーの本当のコアとなる発想やフォーマットをめぐって競い合っているのである。このことは、中国の80年代以後生まれの若い世代にまさにあてはまる。新しい生活様式や消費スタイルを持つこの世代の日本サブカルチャーへのファンは、推定で億8千万人以上といわれる。

サブカルチャーはどこへ行くのか、と問うより、いま世界中で一層加速しているこの文化的「交配」の奔流がどこへ向かうのか、その中であらためて中国と日本の位置を再考してみたい、と思ったものである。

（産経新聞 平成 23 年 10 月 3 日）

3. 地域貢献

◆自治体・地域団体との連携

人文学研究科は、現代日本社会に求められている新たな社会的規範と文化の形成に寄与するために、古典とともに、フィールドワークを重視し、社会文化の高度な動態的分析能力を備え、新たな社会的規範と文化の形成に、組織的に対応しうる能力を持つ人材育成を進めている。

兵庫県は、過疎化が進む中山間部から大都市部、文化接触が日常的に展開する国際港湾都市など多様な地域社会を抱えており、ここでの大学院生及び学生の実践的なフィールドワークを可能とする自治体等との連携、そこにおける社会貢献は、本研究科の人材育成や研究展開のミッションを実現する上で重要な位置を持つものである。

これらの実践は、長年、人文学研究科地域連携センターと自治体や地域住民との間で深められた地域連携事業を前提として、地域社会を「教育フィールド」として活用する形で行われている。小野市、三田市、三木市、朝来市、篠山市などが教育フィールドとして活用されている。たとえば平成23年度には、本学と篠山市との協定に基づいて、同市に設置された篠山フィールドステーションで、学生と大学院生が参加する地域歴史遺産活用演習を泊まりがけで開講した。演習中には、オープンセミナーとして受講学生と地域住民と直に交流した。また平成24年度の夏期古文書合宿では、篠山市日置地区のフィールドワークを行い、その後、受講学生と地域住民とともにサイエンスカフェを開催し歴史文化を活かしたまちづくりにつき議論した。

このような活動は、兵庫県内の自治体やコミュニティからは、地域社会に生じる様々な課題に対する長期的、持続的な対応のための、社会規範と文化形成に対する学術的な方策を提供する点で期待されるとともに高い評価を受けており、その信頼の下に、学生教育のフィールドを持続的に提供していただいている。（資料は、p.45を参照のこと。）

◆高大連携

高校に出向いて行う「出前授業」を毎年6～8校程度で実施している（表を参照、p.23）。8月に神戸大学で行われる高大連携授業でも文学部教員が授業を実施している。さらに高校から神戸大学に来て大学説明、模擬授業等を行うことも、毎年2～3校程度受け入れている。通常の授業のうち、高校生が受講可能なものも毎年5コマ設定している（各講座の「入門」の授業）。その他、すでに述べたような県立御影高等学校と連携した教員養成、さらに兵庫県三田市史編集室と連携した兵庫県立三田祥雲館高校での「歴史研究入門」の開催協力（講師派遣）などがある。

このような取組は地域の高等学校や高校生に神戸大学の特色や魅力を積極的に伝える役割を果たすと同時に、地域における人材養成に積極的に貢献している。兵庫県、そして関西に立地する文学部として、今後とも可能な限りの高大連携活動を今後とも深めていく。

高大連携実施状況						
実施年度	授業区分	高等学校名	期間	場所	参加人数	
2007	出張・出前授業	兵庫県立星陵高等学校	2007/12/19	兵庫県立星陵高等学校	36	
	出張・出前授業	兵庫県立長田高等学校	2007/10/26	兵庫県立長田高校	77	
	出張・出前授業	大阪府立高津高校	2007/7/17	大阪府立高津高校	50	
2008	出張・出前授業	兵庫県立長田高等学校	2008/11/10	兵庫県立長田高等学校	320	
	出張・出前授業	親和女子高等学校	2008/7/17	親和女子高等学校	-	
	体験授業	兵庫県立星陵高等学校	2008/10/31	神戸大学文学部	23	
	体験授業	大阪府立高津高等学校	2008/7/15	大阪府立高津高等学校	41	
	体験授業	兵庫県立北摂三田高等学校	2008/8/1	神戸大学文学部	80	
	体験授業	兵庫県立御影高等学校	2008/8/16	神戸大学文学部	40	
2009	体験授業	兵庫県立星陵高等学校	2009/10/30	神戸大学文学部	14	
	体験授業	兵庫県立星陵高等学校	2009/10/30	神戸大学文学部	7	
	体験授業	開明高等学校	2009/12/14	神戸大学文学部	11	
	出張・出前授業	小野高等学校	2009/6/24	神戸大学文学部	40	
	出張・出前授業	加古川東高等学校	2009/7/2	神戸大学文学部	151	
	出張・出前授業	大阪府立高津高校	2009/7/14	大阪府立高津高校	60	
	出張・出前授業	親和女子高等学校	2009/7/16	神戸大学文学部	27	
	出張・出前授業	兵庫県立長田高校	2009/11/9	神戸大学文学部	75	
2010	出張・出前授業	小野高等学校	2010/6/12	小野高等学校	40	
	体験授業	樟蔭中学校	2010/5/29	神戸大学文学部	30	
	出張・出前授業	大阪府立高津高校	2010/7/14	大阪府立高津高校	46	
	出張・出前授業	兵庫県立長田高等学校	2010/11/12	兵庫県立長田高等学校	-	
	体験授業	兵庫県立御影高等学校	2010/7/9	神戸大学文学部	14	
	出張・出前授業	親和女子高等学校	2010/7/16	親和女子高等学校	27	
	出張・出前授業	滝川第二高等学校	2010/6/23	滝川第二高等学校	70	
	体験授業	兵庫県立星陵高等学校	2010/10/29	兵庫県立星陵高等学校	20	
	出張・出前授業	和歌山県立桐蔭高等学校	2011/3/15	和歌山県立桐蔭高等学校	40	
	出張・出前授業	兵庫県立尼崎小田高等学校	2010/12/21	兵庫県立尼崎小田高等学校	20	
	体験授業	開明高等学校	2010/12/15	神戸大学文学部	20	
	2011	出張・出前授業	小野高等学校	2011/6/22	小野高等学校	40
出張・出前授業		神大附属中等学校	2011/6/8	神大附属中等学校	-	
出張・出前授業		大阪府立高津高校	2011/7/13	大阪府立高津高校	-	
出張・出前授業		兵庫県立長田高等学校	2011/11/11	兵庫県立長田高等学校	-	
出張・出前授業		雲雀丘高等学校	2011/7/16	雲雀丘高等学校	60	
出張・出前授業		親和女子高等学校	2011/7/15	親和女子高等学校	43	
体験授業		樟蔭中学校	2011/7/24	神戸大学文学部	30	
体験授業		兵庫県立星陵高等学校	2011/10/28	神戸大学文学部	13	
体験授業		開明高等学校	2011/12/13	神戸大学文学部	17	
体験授業		鳥取県私立城北高等学校	2011/10/21	神戸大学文学部	40	
出張・出前授業		神戸海星女子学院高等学校	2011/12/1	神戸海星女子学院高等学校	32	
2012		出張・出前授業	雲雀丘高等学校	2012/7/7	雲雀丘高等学校	55
		出張・出前授業	神大附属中等学校	2012/9/27	神大附属中等学校	25
	出張・出前授業	加古川東高等学校	2012/10/11	加古川東高等学校	150	
	出張・出前授業	兵庫県立長田高等学校	2012/10/26	兵庫県立長田高等学校	41	
	出張・出前授業	神戸海星女子学院高等学校	2012/11/29	神戸海星女子学院高等学校	-	
	体験授業	兵庫県立星陵高等学校	2012/10/26	神戸大学文学部	23	
	体験授業	兵庫県立兵庫高等学校	2012/11/16	神戸大学文学部	-	
	出張・出前授業	兵庫県立兵庫高等学校	2012/12/20	兵庫県立兵庫高等学校	-	
2013	出張・出前授業	名城大学付属高校	2013/6/24	名城大学付属高校	—	
	出張・出前授業	神大附属中等教育学校	2013/6/17	神大附属中等教育学校	—	
	出張・出前授業	神戸海星女子学院高等学校	2013/11/19	神戸海星女子学院高等学校	—	
	出張・出前授業	兵庫県立長田高等学校	2013/11/22	兵庫県立長田高等学校	—	
	出張・出前授業	兵庫県立兵庫高等学校	2013/12/20	兵庫県立兵庫高等学校	—	
	出張・出前授業	和歌山県立桐蔭高等学校	2014/3/14	和歌山県立桐蔭高等学校	—	

	高大連携	神戸大学	2013/8/2	神戸大学	—
	附属連携	附属小・中学校	2013/10/12	神戸大学	—
	体験授業	兵庫県立星陵高等学校	2013/10/25	神戸大学	—
2014	出張・出前授業	神大附属中等教育学校	2014/6/26	神大附属中等教育学校	20
	高大連携	神戸大学公開授業	2014/8/5	神戸大学	—
	出張・出前授業	今治西高等学校	2014/9/14	今治西高等学校	—
	出張・出前授業	関西大倉高等学校	2014/10/28	関西大倉高等学校	—
	出張・出前授業	神戸海星女子学院高等学校	2014/11/20	神戸海星女子学院高等学校	—
	体験授業	樟蔭高校	2014/7/25	神戸大学	75
	研究科長要請	夢ナビライブ 2014	2014/7/12	東京ビッグサイト	—
	出張・出前授業	西脇高等学校	2014/10/8	西脇高等学校	—
	体験授業	星陵高校	2014/10/24	神戸大学	4・8
	出張・出前授業	神戸龍谷高等学校	2014/10/30	神戸龍谷高等学校	—
	体験授業	兵庫高校	2014/11/18	神戸大学	—
	出張・出前授業	長田高校	2014/11/21	長田高校	—

「—」は、人数を把握していないことを示す

◆地域に開かれた公開講座

平成 19（2007）年度以降、「家族のかたち」「身体を読む」「異文化接触から生まれるもの」「神戸と越境する文化」「日本社会と大災害」といったテーマのもと（表、pp.25-26 を参照のこと）、4～6名の教員が講演を担当してきており、毎回、数十名の一般市民が参加している。平成 23（2011）年度からは受講料を無料とし、より参加しやすいようにした。テーマも、できる限り地元に関係するように設定しており、特に、震災をテーマにした平成 23（2011）年度は、百名の定員を越す応募があった。今後とも市民に開かれた大学の理念を充実するため、また地域の人々の文化・学術的な関心に応えるために、長期にわたって公開講座を継続したい。

平成20年度 身体を読む

受講者数 48名

開講日	講義内容	講師
H20.10.18	ヨーロッパ文学の食卓	准教授 増本 浩子
"	“人を食う礼教”－中国・伝統社会の教えと身体表現－	教授 森 紀子
H20.10.25	身体社会学－マンガ・医療・ダンス－	教授 油井 清光
"	競技ダンス8種の演技	神戸大学競技ダンス部
H20.11.1	死ぬる身体－生命倫理学の観点から－	准教授 茶谷 直人
"	頭でわかることと体でわかること	准教授 喜多 伸一

平成21年度 異文化接触から生まれるもの－創造と共生の地平－

受講者数 70名

開講日	講義内容	講師
H21.9.26	エジプト学が生まれるまで	講師 伊藤 隆郎
"	哲学における東西の出会い－ジェイムズ、漱石、西田	教授 嘉指 信雄
H21.10.3	生活民族の中の異文化－沖縄の事例－	准教授 大城 直樹
"	言語接触のタイプ	教授 西光 義弘
H21.10.10	シェイクスピアの「マクベス」と 黒澤明の「蜘蛛巣城」	講師 桑山 智成
"	ウルグイ民族の伝統舞踊、民謡、楽器演奏など	シルクロード・ローラン・グループ

平成22年度 神戸と越境する文化－

受講者数 46名

開講日	講義内容	講師
H22.9.25	海港の光と影－都市神戸の人文的環境について	准教授 樋口 大祐
"	開港場神戸のウラ・オモテ－混浴・遊女・新選組	特命助教 添田 仁
H22.10.2	環境リスク論のグローバルな課題としての アスベストによる健康被害－阪神地域からの視点	教授 松田 毅
"	イディッシュ文化とクレズマー音楽の紹介及び演奏	オルケステル・ドレイデル (橋上千寿・大橋祐子・高橋延吉)
H22.10.9	神戸と東南アジアタイにおける「神戸」を事例に	教授 藤井 勝
"	光溢れる美しい湾－小松清とアンドレ・マルロー	准教授 中畑 寛之

平成23年度 日本社会と大災害—古代・中世から3. 11大震災まで—

受講者数 98名

開講日	講義内容	講師
フォーラム(1)「歴史学と文学から」		
H23.9.24	日本古代史における大災害と復興	准教授 古市 晃
"	日本中世文学に描かれた大災害	准教授 樋口 大祐
フォーラム(2)「社会学と心理学から」		
H23.10.1	日本近世の大災害と家族変動	准教授 平井 晶子
"	ソーシャル・サポート—比較文化心理学の観点から	准教授 石井 敬子
フォーラム(3)「哲学と倫理学から」		
H23.10.8	リスクと安全の哲学—天災と人災	教授 松田 毅
"	放射能問題と戦後日本—ヒロシマ・イラク・フクシマ	教授 嘉指 信雄

平成24年度 学びの流儀—教育制度の西・東—

受講者数 109名

開講日	講義内容	講師
フォーラム(1)		
H24.9.22	ギリシア哲学と“学び”	准教授 茶谷 直人
"	フランスの教育制度—日本との比較の視点から—	准教授 白鳥 義彦
フォーラム(2)		
H24.9.29	前近代中国の教育と官僚	准教授 村井 恭子
"	アラブ・イスラム文化圏の学問と教育	准教授 伊藤 隆郎

平成25年度 人と「こころ」の人文学

受講者数 97名

開講日	講義内容	講師
H25.9.28	家族の心性史	准教授 平井 晶子
"	他者の哲学	准教授 中 真生
H.25.10.5	日本人と『ハムレット』	准教授 芦津 かおり
"	古代ギリシアの陪審員—法廷との関わり方をめぐって	准教授 佐藤 昇

開講日	講義内容	講師
H26.9.27	哲学することと西洋哲学	准教授 加藤 憲治
"	歴史を紡ぐことと西洋を生きること—マルク・ブロックと 20 世紀フランスの歴史学	准教授 小山 啓子
H26.10.4	ゲーテ「の」翻訳—『東西詩集』と授業実践	講師 久山 雄甫
"	平安仏画における唐宋絵画の受容と変容—圖像と技法の観点から	准教授 増記 隆介

4. 各界・メディア等で活躍している教員・卒業生

◆教員

嘉指信雄（現代哲学、放射能問題・軍縮に倫理学の立場からかかわる。柿内賢信記念賞・実践賞を受賞）

田中康二（国文学、日本古典文学会賞を受賞）

樋口大輔（国文学、平家物語研究によって学会やメディアから注目される）

濱田麻矢（中国文学、日本中国学会賞を受賞）

増本浩子（ドイツ文学、教育研究上におけるテレビ出演など）

松田浩則（フランス文学、日本文学翻訳出版文化賞受賞）

大津留厚（西洋史学、ハプスブルク家研究の第一人者）

奥村弘（日本史学、阪神大震災以降、歴史資料保存分野での研究活動が注目される）

緒形康（孫文研究会代表理事として活躍）

喜多伸一（心理学、政府の審議会や学会において活躍、電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション賞ならびに日本学術振興会賞を受賞）

石井敬子（心理学、The Michael Harris Bond Award, The Asian Association of Social Psychology を受賞）

野口泰基（心理学、国際臨床神経生理学会奨励賞を受賞）

油井清光（社会学、サブカルチャー研究を行い、メディア等で広く注目される）

平井晶子（社会学、日本人口学会賞を受賞）

宮下規久朗（西洋美術史学、サントリー学芸賞などを受賞）

内藤栄（客員教授）（仏教工芸史、国華賞を受賞）

◆卒業生（※神戸大学文学部・人文学研究科の在職者・退職者は除く。なお、なお個人情報保護の観点から氏名を表示していない）。

- (学部 1953 年卒、奈良女子大学名誉教授)
- (学部 1953 年卒、元大阪大学人間科学部教授・神戸大学名誉教授)
- (学部 1953 年卒、元大和文華館次長)
- (学部 1953 年卒、元NHKアナウンサー)
- (学部 1953 年卒、関西音楽新聞編集者)
- (学部 1953 年卒、脚本家・作詞家)
- (学部 1954 年卒、スタンフォード大学名誉教授)
- (学部 1954 年卒、詩人、丸山豊賞・詩歌文学館賞など受賞)
- (学部 1954 年卒、元大阪産業大学長)
- (学部 1954 年卒、元関西歌劇団理事・大阪音楽大学名誉教授)
- (学部 1955 年卒、神戸大学名誉教授 (国際文化学部))
- (学部 1955 年卒、元テレビディレクター・プロデューサー)
- (学部 1955 年卒、成城大学名誉教授)
- (学部 1955 年卒、同志社大学名誉教授)
- (学部 1955 年卒、元日本通運 (株) 参与)
- (学部 1956 年卒、文化勲章受章・文化功労者)
- (学部 1956 年卒、元天理高校校長・柔道部監督・奈良県柔道連盟会長)
- (学部 1956 年卒、日本大学名誉教授)
- (学部 1956 年卒、元大阪府立大学大学院人間文化学研究科長)
- (学部 1957 年卒、元栗田工業 (株) 代表取締役社長)
- (学部 1957 年卒、株エフエム九州社長)
- (学部 1957 年卒、名古屋大学名誉教授)
- (専攻 1957 年卒、神戸大学名誉教授 (国際文化学部))
- (学部 1958 年卒、元金光教教学研究所長・金光教国際センター長)
- (学部 1958 年卒、大阪大学名誉教授)
- (学部 1958 年卒、元サントリー宣伝部長・取締役)
- (学部 1958 年卒、元 (株) フジサンケイリビングサービス専務取締役)
- (学部 1958 年卒、神戸大学名誉教授 (国際文化学部))
- (学部 1959 年卒、元NHKディレクター)
- (学部 1959 年卒、元NHKディレクター)
- (学部 1960 年卒、奈良女子大学名誉教授)
- (学部 1960 年卒、(株) 阪急交通社取締役)
- (学部 1960 年卒、元日清食品 (株) 常務取締役)
- (学部 1960 年卒、神戸大学名誉教授 (国際文化学部))
- (学部 1961 年卒、元 (株) 電通関西支社クリエイティブ局長、大阪コミュニケーション
アート専門学校校長・東京コミュニケーションアート専門学校名誉校長)

- (学部 1961 年卒、東京大学名誉教授)
- (学部 1961 年卒、(株)大広監査役)
- (専攻 1961 年卒、成城大学名誉教授)
- (学部 1962 年卒、元撰南大学長)
- (学部 1962 年卒、元三菱自動車バス製造(株)社長)
- (学部 1962 年卒、元オムロン(株)顧問)
- (学部 1963 年卒、京都大学名誉教授)
- (学部 1963 年卒、詩人、H氏賞・現代詩人賞など受賞)
- (学部 1963 年卒、元朝日新聞社出版局長)
- (学部 1963 年卒、元NHKエグゼクティブプロデューサー)
- (学部 1963 年、元サンケイスポーツ事業部長)
- (学部 1964 年卒、元読売新聞大阪本社常務監査役)
- (学部 1964 年卒、コピーライター・作詞家)
- (学部 1964 年卒、元神戸新聞論説委員・元関西ラジオ社長)
- (学部 1965 年卒、元神戸新聞常務取締役)
- (学部 1965 年卒、元奈良女子大学教授・神戸大学名誉教授)
- (学部 1965 年卒、元高校教員、野球部監督として浜松商業高校・常葉学園菊川高校を甲子園優勝に導く)
- (学部 1966 年卒、元読売新聞大阪本社専務取締役)
- (学部 1967 年卒、元ポニーキャニオン社長・元日本映像ソフト協会会長)
- (学部 1967 年卒、神戸学院大学名誉教授・日本孫文研究会代表理事)
- (学部 1968 年卒、元朝日新聞東京本社企画報道室)
- (学部 1968 年卒、元大阪放送代表取締役社長)
- (学部 1968 年卒、元(株)電通西日本専務取締役広島支社長)
- (学部 1969 年卒、元大和文華館次長)
- (学部 1969 年卒、公認会計士・元中央青山監査法人所属)
- (学部 1969 年卒、元大谷大学文学部教授・大阪国際理解教育研究センター理事長など)
- (学部 1971 年卒、大阪大学名誉教授)
- (学部 1971 年卒、名古屋大学名誉教授)
- (学部 1971 年卒、神戸大学名誉教授(国際文化学部))
- (学部 1971 年卒、元(元)大広ブランドデザイン常務取締役)
- (学部 1972 年卒、広島大学大学院文学研究科教授)
- (学部 1972 年卒、筑波大学大学院人間総合科学研究科教授・国際ギリシア哲学会名誉会長)
- (学部 1972 年卒、元近畿日本ツーリスト首都圏商品事業本部管理部長)
- (学部 1972 年、国文学研究資料館教授)
- (学部 1973 年卒、毎日新聞社常務取締役)
- (学部 1973 年卒、元博報堂DYホールディングス経営企画室長代理)
- (学部 1973 年卒、大阪大学大学院言語文化研究科教授)
- (修士 1973 年卒、関西学院大学文学部教授)
- (学部 1974 年卒、甲南女子大学人間科学部長)

- (学部 1974 年卒、神戸新聞社執行役員)
- (学部 1974 年卒、大阪府政情報室参事・元博報堂DYメディアパートナーズ関西支社長代理)
- (修士 1974 年卒、立命館大学国際関係学部教授)
- (学部 1975 年卒、外務省在ハンブルグ総領事)
- (学部 1975 年卒、阪急阪神交通社ホールディングス取締役執行役員)
- (学部 1975 年卒、三谷商事常務取締役)
- (学部 1975 年卒、追手門学院大学副学長)
- (学部 1975 年卒、成蹊大学文学部教授)
- (学部 1975 年卒、金沢大学人間社会学域教授)
- (学部 1975 年卒、NPO 研修・情報センター代表、元金沢大学教授)
- (修士 1975 年卒、京都市立芸術大学美術学部教授)
- (修士 1975 年卒、元宮内庁正倉院事務所長・奈良大学文学部教授)
- (学部 1976 年卒、パウル・クレー研究の第一人者<スイス在住>)
- (学部 1976 年卒、神戸大学大学院国際文化学研究科教授)
- (学部 1976 年卒、上智大学文学部教授)
- (学部 1977 年卒、神戸新聞社編集局長)
- (学部 1977 年卒、同志社大学文化情報学部教授)
- (学部 1978 年卒、元(株)阪神タイガース専務取締役)
- (学部 1978 年卒、(株)DNP 四国代表取締役社長)
- (学部 1978 年卒、横浜国立大学教育人間科学部長)
- (修士 1979 年卒、産経新聞社編集委員)
- (学部 1980 年卒、広島大学大学院総合科学研究科教授)
- (学部 1980 年卒、大谷大学大学院文学研究科長)
- (学部 1980 年卒、神戸市立博物館学芸員、国華賞受賞)
- (学部 1980 年卒、岩手朝日テレビ取締役)
- (学部 1981 年卒、東京放送総務局広報兼人事労政局担当次長)
- (学部 1981 年卒、元サントリー宣伝部勤務、映画監督など)
- (学部 1981 年卒、大阪大学大学院文学研究科教授)
- (学部 1981 年卒、世界自然保護基金(WWF) ジャパン気候変動オフィサー、日本気象予報士会副会長)
- (学部 1981 年卒、神戸大学大学院国際文化研究科教授)
- (学部 1982 年卒、島根大学法文学部長)
- (学部 1982 年卒、大阪市立大学大学院文学研究科教授)
- (修士 1982 年卒、東洋大学文学部教授)
- (学部 1983 年卒、東京女子大学現代教養学部教授)
- (学部 1984 年卒、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授)
- (学部 1984 年卒、神戸大学大学院経営学研究科教授)
- (学部 1984 年卒、読売テレビ・チーフプロデューサー)
- (学部 1984 年卒、大阪城天守閣研究主幹)
- (学部 1984 年卒、読売テレビ総務局労政部長)

- (修士 1984 年卒、釜山大学教授)
- (学部 1985 年卒、大和文華館次長)
- (修士 1985 年卒、北京外国語大学日本学研究センター所長)
- (学部 1985 年卒、同志社大学文学部教授)
- (修士 1985 年卒、神戸大学大学院国際文化学研究科教授)
- (学部 1986 年卒、吹替翻訳家)
- (学部 1986 年卒、関西学院大学経済学部教授)
- (修士 1986 年卒、国際日本文化研究センター准教授)
- (博士 1986 卒、東京大学史料編纂所教授)
- (学部 1987 年卒、関西テレビプロデューサー)
- (学部 1987 年卒、ノンフィクション作家、ジャーナリスト)
- (学部 1987 年卒、北日本新聞総務局総務部長デスク)
- (修士 1987 年卒、在日ハンガリー大使)
- (修士 1987 年卒、京都大学大学院人間・環境学研究科教授)
- (博士 1987 年卒、岐阜大学副学長)
- (学部 1988 年卒、京都府立大学教授、サントリー学芸賞・大平正芳記念賞受賞者)
- (学部 1988 年卒、国立国際美術館主任研究員)
- (学部 1988 年卒、野村ホールディングス執行役員) *女性初の執行役員
- (学部 1988 年卒、朝日放送アナウンサー)
- (修士 1988 年卒、北京大学東方学系教授)
- (修士 1988 年卒、大阪市立大学文学研究科教授)
- (修士 1988 年卒、岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授)
- (学部 1989 年卒、東京大学大学院総合文化研究科准教授)
- (博士 1989 年卒、奈良女子大学大学院教授)
- (学部 1990 年卒、慶応大学文学部教授)
- (修士 1990 年卒、大阪市立大学大学院経済学研究科教授)
- (修士 1990 年卒、大阪城天守閣主任学芸員)
- (修士 1990 年卒、韓国外語大学校教授)
- (博士 1990 年卒、広島大学大学院総合科学研究科教授)
- (修士 1991 年卒、高麗大学教授)
- (修士 1991 年、筑波大学大学院人文社会科学研究科准教授)
- (修士 1992 年卒、大阪大学大学院言語文化研究科准教授)
- (博士 1992 年卒、岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授)
- (学部 1993 年卒、NHKエグゼクティブプロデューサー)
- (学部 1993 年卒、朝日放送チーフプロデューサー)
- (修士 1993 年卒、台北国立故宮博物館研究員)
- (修士 1993 年卒、京都国立博物館学芸部教育室長・国華賞受賞)
- (修士 1994 年卒、同志社大学文学部准教授)
- (博士 1996 年卒、広島大学大学院社会学研究科教授)
- (博士 2000 年卒、華東師範大学教育学部教授)

【平成 25 (2013) 年 2 月現在】

◆審議会等の委員（現職教員）

平成 26 (2014) 年度	
氏名	役職
奥村 弘 (日本史学)	伊丹市修史等専門委員 三田市文化財保護審議会委員 神戸市灘区・灘区民まちづくり会議委員 国立歴史民俗博物館運営会議歴博外部評価委員会委員 加西市情報公開審査会委員及び加西市個人情報保護審査会委員 神戸市灘区・灘区民まちづくり会議委員
河島 真 (日本史学)	三木市情報公開審査会委員及び三木市個人情報保護審査会委員 八尾市史専門部会員
喜多 伸一 (心理学)	総務省「戦略的情報通信研究開発推進制度」評価委員会委員
宮下 規久朗 (美術史学)	日本学術会議連携会員
福長 進 (国文学)	国文学研究資料古典籍データベース研究事業センター拠点連絡委員会委員

平成 25 (2013) 年度	
氏名	役職
奥村 弘 (日本史学)	伊丹市修史等専門委員 三田市文化財保護審議会委員 神戸市灘区・灘区民まちづくり会議委員 国立歴史民俗博物館運営会議歴博外部評価委員会委員 加西市情報公開審査会委員及び加西市個人情報保護審査会委員
河島 真 (日本史学)	八尾市史専門部会員
喜多 伸一 (心理学)	総務省「戦略的情報通信研究開発推進制度」評価委員会委員
宮下 規久朗 (美術史学)	日本学術会議連携会員
百橋 明穂 (美術史学)	奈良県文化財保護審議会委員
福長 進 (国文学)	国文学研究資料古典籍データベース研究事業センター拠点連絡委員会委員

平成 24 (2012) 年度	
氏名	役職
奥村 弘 (日本史学)	神戸市灘区・灘区民まちづくり会議委員 三田市文化財保護審議会委員 国立歴史民俗博物館運営会議歴博外部評価委員会委員
河島 真 (日本史学)	八尾市史専門部会員
緒形 康 (東洋史学)	財団法人孫中山記念会常務理事
佐々木 衛 (社会学)	日本学術振興会北京研究連絡センター長
宮下 規久朗 (美術史学)	西宮市大谷記念美術館運営委員
百橋 明穂 (美術史学)	奈良県文化財保護審議会委員 伯耆古代の丘整備検討委員会委員 兵庫県立歴史博物館資料審査会委員 兵庫県文化財保護審議会委員

坂江 渉 (講座外)	加西市観光推進基本計画策定委員会委員 高砂市文化財審議委員会委員 加西市文化財審議委員
------------	---

平成 23 (2011) 年度

氏名	役職
樋口 大祐(国文学)	神戸定住外国人支援センター (KFC) 理事 定住外国人子ども奨学金事業実行委員
釜谷 武志 (中国文学)	大学基準協会評価委員会委員
奥村 弘 (日本史学)	伊丹市修史等専門委員 三田市文化財審議委員 明石市文化財審議委員
市澤 哲 (日本史学)	尼崎市立地域研究史料館専門委員
河島 真 (日本史学)	八尾市史専門部会員 兵庫県立御影高等学校学校関係者評価委員会委員
緒形 康 (東洋史学)	財団法人孫中山記念会常務理事
喜多 伸一 (心理学)	総務省「グローバル時代における ICT 政策に関するタスクフォース」構成員
佐々木 衛 (社会学)	日本学術振興会北京研究連絡センター長
黒田 千晴 (社会学)	兵庫県国際交流協会フランスセヌ・エ・マルヌ県派遣日本文化教師選考委員
宮下 規久朗 (美術史学)	西宮市大谷記念美術館運営委員 日本学術会議連携会員 国立大学法人総合研究大学院大学グローバル COE プログラム評価部会委員
藤田 裕嗣 (地理学)	兵庫県教育委員会「平清盛と源平関連文化財群調査検討会委員」 兵庫県立御影高等学校評価委員

平成 22 (2010) 年度

氏名	役職
樋口 大祐 (国文学)	神戸定住外国人支援センター (KFC) 理事 定住外国人子ども奨学金事業実行委員
釜谷 武志 (中国文学)	大学基準協会評価委員会委員 文部科学省高等教育局大学設置・学校法人審議会 (大学設置分科会) 専門委員
奥村 弘 (日本史学)	歴史資料ネットワーク代表委員 三田市市史編纂委員 香寺町史編纂委員 新宮町史編纂委員 伊丹市修史等専門委員
市澤 哲 (日本史学)	尼崎市立地域研究史料館専門委員
緒形 康 (東洋史学)	財団法人孫中山記念会常務理事
大津留 厚 (西洋史学)	ミネソタ大学・オーストリア研究センター日本代表 日本学術振興会「魅力ある大学院教育イニシヤティブ」委員会分野別審査部会 専門委員 日本学術振興会「大学院教育改革支援プログラム」人社系審査部会審査委員
喜多 伸一 (心理学)	総務省「グローバル時代における ICT 政策に関するタスクフォース」構成員

油井 清光 (社会学)	日本学術振興会・学術システム研究センター専門研究員
黒田 千晴 (社会学)	中央教育審議会大学分科会大学教育の検討に関する作業部会 大学グローバル化検討ワーキンググループ委員
百橋 明穂 (美術史学)	財団法人仏教美術研究上野財団評議員 神戸市立博物館運営協議会委員 大阪市文化財審議会委員 兵庫県文化財保護審議会委員 兵庫県立歴史博物館資料審査会委員 兵庫県立美術館審美委員会委員 奈良県文化財保護審議会委員会委員 石山寺文化財総合調査団 財団法人大和文華館理事 国宝薬師寺東塔修理事業専門委員会委員 米子市教育委員会(伯耆古代の丘整備検討委員会)委員 財団法人白鶴美術館理事性空上人調査委員会委員 財団法人滴水美術館評議員
宮下 規久朗 (美術史学)	西宮市大谷記念美術館運営委員 日本学術会議連携会員 国立大学法人総合研究大学院大学グローバル COE プログラム評価部会委員
長谷川 孝治 (地理学)	国立歴史民俗博物館リニューアル委員 神戸市立博物館評価委員 堺市博物館評価委員
大城 直樹 (地理学)	灘区地域活動支援コーディネーター選考会審査委員
藤田 裕嗣 (地理学)	朝来市生野鉾山の文化的景観保存計画策定委員会委員 同保存計画策定委員会委員 県立御影高等学校評価委員

平成 21 (2009) 年度

氏名	役職
樋口 大祐 (国文学)	神戸定住外国人支援センター (KFC) 理事 定住外国人子ども奨学金事業実行委員
釜谷 武志 (中国文学)	大学基準協会評価委員会委員 文部科学省高等教育局大学設置・学校法人審議会(大学設置分科会) 専門委員
河合成雄 (西洋比較文学)	財団法人日本イタリア京都会館評議員
奥村 弘 (日本史学)	三田市市史編纂委員 香寺町史編纂委員 新宮町史編纂委員 伊丹市修史等専門委員
市澤 哲 (日本史学)	尼崎市立地域研究史料館専門委員
緒形 康 (東洋史学)	財団法人孫中山記念会常務理事
大津留 厚 (西洋史学)	ミネソタ大学・オーストリア研究センター日本代表 日本学術振興会「魅力ある大学院教育イニシヤティブ」委員会分野別審査部会 専門委員 日本学術振興会「大学院教育改革支援プログラム」人社系審査部会審査委員
喜多 伸一 (心理学)	総務省「グローバル時代における ICT 政策に関するタスクフォース」構成員
窪菌 晴夫 (言語学)	市河三喜賞審査委員
油井 清光 (社会学)	日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員

百橋 明穂 (美術史学)	財団法人仏教美術研究上野財団評議員 神戸市立博物館運営協議会委員 大阪市文化財審議会委員 兵庫県文化財保護審議会委員 兵庫県立歴史博物館資料審査会委員 兵庫県立美術館審美委員会委員 奈良県文化財保護審議会委員会委員 石山寺文化財総合調査団 財団法人大和文華館理事 国宝薬師寺東塔修理事業専門委員会委員
宮下 規久朗 (美術史学)	西宮市大谷記念美術館運営委員 日本学術会議連携会員 国立大学法人総合研究大学院大学グローバル COE プログラム評価部会委員
長谷川 孝治 (地理学)	国立歴史民俗博物館リニューアル委員 神戸市立博物館評価委員 堺市博物館評価委員
大城 直樹 (地理学)	「地域力を高める」手づくりの活動・事業助成選考会審査委員
藤田 裕嗣 (地理学)	枚方市楠葉台場跡調査検討委員会委員 朝来市生野鉾山の文化的景観調査委員会委員

平成 20 (2008) 年度

氏名	役職
樋口 大祐 (国文学)	神戸定住外国人支援センター (KFC) 理事 定住外国人子ども奨学金事業実行委員
河合成雄 (西洋比較文学)	財団法人日本イタリア京都会館評議員
奥村 弘 (日本史学)	三田市市史編纂委員 香寺町史編纂委員 新宮町史編纂委員 伊丹市修史等専門委員
市澤 哲 (日本史学)	尼崎市立地域研究史料館専門委員
緒形 康 (東洋史学)	財団法人孫中山記念会常務理事
大津留 厚 (西洋史学)	ミネソタ大学・オーストリア研究センター日本代表 日本学術振興会「魅力ある大学院教育イニシヤティブ」委員会分野別審査部会 専門委員 日本学術振興会「大学院教育改革支援プログラム」人社系審査部会審査委員
瀬口郁子 (心理学)	兵庫県「国際的な人の移動研究会」委員 兵庫県「フランス セーヌ・エ・マルヌ県派遣日本文化教師」選考委員
窪菌 晴夫 (言語学)	日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員 市河三喜賞審査委員

百橋 明穂 (美術史学)	財団法人仏教美術研究上野財団評議員 神戸市立博物館運営協議会委員 大阪市文化財審議会委員 兵庫県文化財保護審議会委員 兵庫県立歴史博物館資料審査会委員 兵庫県立美術館審美委員会委員 奈良県文化財保護審議会委員会委員 石山寺文化財総合調査団 財団法人大和文華館理事
宮下 規久朗 (美術史学)	西宮市大谷記念美術館運営委員 日本学術会議連携会員 国立大学法人総合研究大学院大学グローバル COE プログラム評価部会委員
長谷川 孝治 (地理学)	国立歴史民俗博物館リニューアル委員 神戸市立博物館評価委員 堺市博物館評価委員
大城 直樹 (心理学)	「地域力を高める」手づくりの活動・事業助成選考会審査委員
藤田 裕嗣 (地理学)	枚方市楠葉台場跡調査検討委員会委員

平成 19 (2007) 年度

氏名	役職
樋口 大祐 (国文学)	神戸定住外国人支援センター (KFC) 理事
河合成雄 (西洋比較文学)	財団法人日本イタリア京都会館評議員
高橋 昌明 (日本史学)	日本学術会議連携委員
奥村 弘 (日本史学)	三田市市史編纂委員 香寺町史編纂委員 新宮町史編纂委員 伊丹市修史等専門委員
市澤 哲 (日本史学)	尼崎市立地域研究史料館専門委員
森 紀子 (東洋史学)	財団法人孫中山記念会評議員
緒形 康 (東洋史学)	財団法人孫中山記念会常務理事
大津留 厚 (西洋史学)	ミネソタ大学・オーストリア研究センター日本代表 日本学術振興会「魅力ある大学院教育イニシヤティブ」委員会分野別審査部会専門委員 日本学術振興会「大学院教育改革支援プログラム」人社系審査部会審査委員
瀬口 郁子 (心理学)	兵庫県「国際的な人の移動研究会」委員 兵庫県「フランス セーヌ・エ・マルヌ県派遣日本文化教師」選考委員
窪菌 晴夫 (言語学)	日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員 市河三喜賞審査委員
百橋 明穂 (美術史学)	財団法人仏教美術研究上野財団評議員 神戸市立博物館運営協議会委員 大阪市文化財審議会委員 兵庫県文化財保護審議会委員 兵庫県立歴史博物館資料審査会委員 兵庫県立美術館審美委員会委員 奈良県文化財保護審議会委員会委員 石山寺文化財総合調査団 財団法人大和文華館理事

宮下 規久朗（美術史学）	平成9年11月－ 西宮市大谷記念美術館運営委員 平成18年8月－ 日本学術会議連携会員
長谷川 孝治（地理学）	国立歴史民俗博物館リニューアル委員 神戸市立博物館評価委員 堺市博物館評価委員
大城 直樹（地理学）	「地域力を高める」手づくりの活動・事業助成選考会審査委員

資料 大学院教育改革プログラム

**組織的な大学院教育改革推進プログラム(平成20年度採択教育プログラム)
事後評価結果一覧(総括表)**

総括評価 \ 系	人社系	理工農系	医療系	合計
	件	件	件	件
目的は十分に達成された	2	5	3	10
目的はほぼ達成された	15	17	9	41
目的はある程度達成された	8	4	3	15
目的はあまり達成されていない	0	0	0	0
合計	25	26	15	66

(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/daigakuin/icsFiles/afieldfile/2012/02/17/1316363_01.pdf)

表1 〈4つの場〉関連実施状況一覧

	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度
シンポジウム	人文学における対話の重要性—古典と現代社会—	人文学における古典と対話	総括シンポジウム
古典ゼミナール	ジェンダー論研究会	ジェンダー論研究会	ジェンダー論研究会
	東アジアにおける「伝統社会の形成」研究会	東アジアにおける「伝統社会の形成」研究会	東アジアにおける「伝統社会の形成」研究会
	アジア海域史研究会	アジア海域史研究会	アジア海域史研究会
	リスク論研究会	リスク論研究会	リスク論研究会
	アリストテレス研究会	アリストテレス研究会	ギリシア語原典講読研究会
	兵庫津・神戸研究会	兵庫津・神戸研究会	兵庫津・神戸研究会
	マックス・ウェーバー研究会	日本語動詞研究会	日本語動詞研究会
	日本語動詞研究会	映像と諸文化研究会	映像と諸文化研究会
	映像と諸文化研究会	「他者と欲望」をめぐる現代思想研究会	「他者と欲望」をめぐる現代思想研究会
		フランス現代思想研究会	フランス現代思想研究会
		現代社会論研究会	現代社会論研究会
		感性を巡る思想研究会	感性を巡る思想研究会
	古典と美術史研究会	古典と美術史研究会	
	「西洋人の見た」中国研究会		
フォーラム	ノン・アスベスト社会のために(V)—リスク・コミュニケーションの課題と実践	脚韻に理由あり	揺れる法廷？ —裁判員制度における〈判定〉
	ヨーロッパにおける〈マンガ〉と〈日本〉	日系三世映画監督&アーティスト リンダ・オオハマが語る日系カナダ 人体験	トラウマを語ること/語らないことと支援者の 役割—ノンアスベスト社会のために(VI)
	バイオエシックスとカント	日本語日本文化教育インスティテ ュート設立記念 講演シリーズ	公共人文学としての文学 (Literature as Public Humanities)
	自治体合併後の地域遺産の保全・ 活用をめぐる現状と課題	アメリカにおけるフェミニスト思想 の現在	モダニティーの多元性:中国台頭の背景—い かに富強から文明に向かうのか—
	アリストテレス哲学としての「詩学」	バイオエシックスの諸相 —原理と実践	英語論文執筆の技法—若手研究者のため のアカデミックライティング—
	カント感性論の現在形	アジアにおける文化的記憶	TV ゲームの感性的論理 —ニューメディアと文化—
	社会学的対話とコミュニケーション	モダニティーの多元性—東アジ アの「伝統社会」から考える	日本のマイノリティと人文学研究
	ジェンダーの可能性を考える	カントと人文学	モダニティーの多元性 —戦争・漫画・ジェンダー—

	日仏二社会の珪肺・アスベスト疾患—空間的マッピングと人文学的研究—	震災から15年—地域歴史資料の現在	イメージを通じた日中共生文化プログラム	
		人文学における古典と対話	〈美的=感性的〉人間の誕生—ライプニッツからバウムガルテンまで—	
		西田哲学の現在	公害被害の歴史と現在—語り継ぎと学際的研究—	
			神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報『LINK』第2号書評会 地域歴史文化を担う人材像を考える	
コロキウム	長谷川理論のレガシー	日本研究における次世代研究者たちの出会いの場	美学とジェンダー—キャロリン・コースマイヤー—『美学—ジェンダーの視点から』書評会	
	資料収集・研究交流会	東アジアにおける比較市民社会論	1st International Conference: Applied Ethics and Applied Philosophy in East Asia	
	モダニティーの多元性—東アジアの視点から	水俣病をめぐる研究交流会	第3回若手人文学研究者の出会いの場	
	応用倫理学の課題	近代アジアにおける教育	教育のポリシーとポリティクス—近代中国、オスマン帝国、フランスにおける教育と政治	
		第5回海港都市国際学術シンポジウム「越境する人々とナショナルイズム」	資料収集・研究交流会	第6回海港都市国際学術シンポジウム—東アジア海港都市文化の発展—越境ネットワークと社会変遷
				「古典ゼミ☆コロキウム」 資料収集・研究交流会
		生野銀山古文書合宿	移情閣で孫文「大アジア主義」講演を読む	正当性のまぼろしを追いかけて
	古典サロン	場との交流—いま・ここで生まれる何かを求めて	生野銀山古文書合宿	
		生野銀山古文書合宿		
	古典カフェ	古典カフェ(古典ゼミ紹介)	古典カフェII(古典ゼミ紹介)	
		レジュメのつくりかた 異文化交流—留学生写真展示会:神戸で出会い、世界にはばたけ		

資料 神戸オックスフォード日本学プログラム



神戸大学文学部

2012年10月から 「神戸オックスフォード 日本学プログラム」 始動!

ハートフォードカレッジでの
学生交換に関する調印式
(次ページ参照)

オックスフォード大学東洋学部から 12名の学生が神戸大学文学部へ



オックスフォード大学ハミルトン学長と釜谷文学部長

2011年3月に神戸大学は、オックスフォード大学との間に、学術交流協定を締結しました。併せて神戸大学文学部は、オックスフォード大学東洋学部 (Faculty of Oriental Studies) との間に、「神戸オックスフォード日本学プログラム」に関する協定を結びました。

この協定調印によって、神戸大学文学部は、オックスフォード大学東洋学部が日本学プログラムのために推薦する学生を、2012年秋学期から受け入れることになりました。参加学生はオックスフォード大学東洋学部2年次の日本学専攻学生全員で、定員は12名です。このプログラムは、学位取得を目的としない学習に対して、1年(10月から翌年9月)に限り提供されます。

12名の学生は、オックスフォード大学入学後の1年目は英国で学び、2年目は神戸大学文学部で学習し、帰国後の3年目と4年目はまた英国で学ぶことになります。12名が帰国した後は、次の学年の12名が留学してきて、常時12名の学生が在

学していることになります。神戸大学文学部では、毎日午前中は日本語に関する授業を受け、午後は文学部で開講している専門科目を受講します。したがって、午後の専門科目は、文学部の日本人学生と机を並べて学ぶことになります。それ以外にも「自由課題演習」の開設を予定しています。この科目は、日本に関するさまざまな問題から自由にテーマを選んで、そのテーマについて自分で調査を行いながらまとめていくものです。資料の収集や読解にあたっては、日本人学生との協同作業を行います。こうした作業を通して、文学部学生もオックスフォード大学での学習がどのようなものであるのか、その一端をうかがうことができます。

「神戸オックスフォード日本学プログラム」における交流の担い手は、神戸大学側は文学部・大学院人文学研究科の日本学・東洋学を専攻する研究者・大学院生・学生が中心となりますし、オックスフォード大学側は東洋学部、ハートフォードカレッジ(Hertford College)、日産・日本文化

インスティテュートが中心となります。

オックスフォード大学の日本学は、1964年に東洋部の正規のコースとなって以来、1980年には日産・日本文化インスティテュート現代日本研究所を傘下に加え、現在の盛況に至っています。ハートフォードカレッジは、そうしたオックスフォード日本学を推進するカレッジの1つです。その創設は13世紀にまで遡り、トーマス・ホプズ、ジョナサン・スウィフト、エヴリン・ウォー等、錚々たる文化人を輩出してきた、歴史を有するカレッジです。その学舎はオックスフォードの中心部に位置し、ボードリアン図書館をはじめとするオックスフォード大学の主要な施設やカレッジに取り囲まれたすばらしい環境にあります。欧州を代表するオックスフォードの日本学研究との交流を深めることで、神戸大学文学部がこれまで築き上げてきた日本学や東洋学が、さらに充実したものになることが期待されます。

神戸大学創立110周年記念

神戸オックスフォード 日本学プログラム キックオフシンポジウム



日時：2012年11月7日(水) 午後1時30分より
場所：神戸大学瀧川記念学術交流会館

プログラム

13:30~

1. 開会の挨拶 神戸大学長 福田 秀樹
2. 来賓挨拶 文部科学省高等教育局 高等教育企画課国際企画室長 有賀 理
兵庫県国際交流協会副理事長 西田 裕
3. 挨拶と学生紹介 人文学研究科長 藤井 勝
オックスフォード大学東洋学部学生代表 シャーロット フィット
4. 記念講演 文化勲章受章者・石川県立歴史博物館長 脇田 晴子
演題「日本史研究者から見たオックスフォード大学」

< 休憩 >

14:30~

5. シンポジウム講演Ⅰ オックスフォード大学東洋学部長 ビヤーク フレレスピッグ
6. シンポジウム講演Ⅱ オックスフォード大学教授 刈谷 剛彦

< 休憩 >

15:40~

7. 討論 討論者：人文学研究科准教授 白鳥 義彦
人文学研究科准教授 芦津 かおり
人文学研究科准教授 茶谷 直人

16:30~ 全体討論

8. 閉会の挨拶 神戸大学理事・副学長 中村 千春



教育のグローバル化

— 新たな次元をもとめて —



主催 神戸大学 お問い合わせ 神戸大学人文学研究科総務係 Tel : 078-803-5591 Email : lsoumu@lit.kobe-u.ac.jp

資料 倫理創成プロジェクト



(産経新聞 平成 24 (2012) 年 6 月 6 日)



(神戸新聞 平成 24 (2012) 年 7 月 1 日)



(日経新聞 平成 24 (2012) 年 9 月 29 日)

過去の倫理創成研究会の開催一覧 (平成 21 (2009) 年度以降のもの)

- ・平成 21 年 (2009 年) 度
- 第 27 回「トランスカルチュラルな近代化としての技術移転」：
Bernhard Irrgang(ドレスデン工科大学教授)
- 第 28 回「エコロジカルな想像力：メタファーの力」：
スティーブン・フェスマイヤー(グリーン・マウンテン・カレッジ准教授)
- 第 29 回 *The Japanese Canadian Experience from Nikkei Sansei Film Director and Artist Linda Ohama's Perspective*：
日系三世映画監督&アーティスト、リンダ・オオハマが語る日系カナダ人体験)
- 第 30 回 *Feminist Ethics in the American Tradition*：
ヘザー・キース (グリーン・マウンテン・カレッジ准教授)
- 第 31 回「バイオエシックスの諸相—原理と実践」
「応用の学としての倫理学と古典テキスト・現代の医療にどう向き合うか」：
田中伸司(静岡大学教授)

「応答としての看護・看護の経験が生成される臨床の場からみえてきたこと」：

前川幸子(甲南女子大学教授)

第32回 *More Effective Communication through Personal Storytelling* : Dan Kwong

(パフォーマンス・アーティスト)による「対話力」ワークショップ

第33回「フォトジャーナリストが見た『ニュースの現場』イラク・パレスチナ・スマトラ...」：豊田直巳

第34回 フォーラム「カントと人文学」

The view of Newtonian Mechanism in Kant's Physical Monadology— The significance of conversion of 'power' by Kant : 信田尚久 (神戸大学文化科学研究科大学院生)

Another Form of Truth—Reconsidering 'Aesthetic Truth' in Kant's Theory of Error : 伊藤政志 (近畿大学医学部非常勤講師)

Integrating Kant : Martin Schönfeld (南フロリダ大学教授)

第35回 フォーラム「西田哲学の現在」

「西田における個物概念の発生」：ローラン・ステリン(京都大学文学部)、

「カイロスの系譜—西田時間論の新解釈にむけて」：小林敏明(ライプツィヒ大学東アジア研究所教授)

・平成22年(2010年)度

第36回 フォーラム 「トラウマを語ること/語らないことと支援者の役割—ノンアスベスト社会のために(VI)」：宮地尚子(一橋大学大学院教授)

第37回 フォーラム「日本のマイノリティと人文学研究」：ジェンダー論研究会主催、(他者)をめぐる人文学研究会共催。

「明治五年『芸娼妓解放令』の歴史的意義」：人見佐知子(甲南大学人間科学研究所博士研究員)

「『多様な性』を再考する」：本林良章(神戸大学人文学研究科博士前期課程)

「民族マイノリティのジレンマ—在日コリアンの民族性の行方—」：李明哲(神戸大学人文学研究科博士前期課程)

「原爆文学と差別」：ティヤナ・プレスコニッチ(神戸大学人文学研究科博士後期課程)

「主体概念から考察するマイノリティ」：大家 慎也(神戸大学人文学研究科博士前期課程)

第38回 フォーラム「公害被害の歴史と現在：語り継ぎと学際的研究」：

「『公害を学ぶ場』をつくる資料館—公害地域の今を伝えるスタディツアーの実践より—」：林美帆((財)公害地域再生センター(あおぞら財団))

「海に生きる人々と水俣病」：井上ゆかり(熊本学園大学水俣学研究センター研究助手)

「水俣病被害者の実存と病弱教育史の研究的意味」：宮部修一(熊本学園大学社会福祉学研究科博士後期課程、同大学非常勤講師)

「四日市公害の教訓を伝える活動」：榊枝正史(なたね通信・代表)

「甲子園浜の保全をめぐる住民運動と大学教育の接点」：阪野祐介(神戸大学大学院人文学研究科)

「神戸大学・精華大学マンガプロジェクト」松田毅(神戸大学人文学研究科) 早坂真一(神戸大学人文学研究科博士後期課程)

第39回 (神戸大学「共生倫理」研究会 特別講演会)

「野生と野性の狭間—害獣との共存を考える」

丸山康司(名古屋大学大学院環境学研究科 社会環境学専攻(社会講座)准教授)

・平成23年(2011年)度

第40回 フォーラム「アスベスト被害の深層を問う集い 調査協力・伝達方法・国際協力」共催：京都精華大学 マンガ研究科 神戸大学と京都精華大学によるアスベスト被害に関するマンガ共同制作紹介と意見交換会
・横浜市鶴見区旧朝日石綿工場周辺健康被害に関する研究調査報告

(報告者：日本学術振興会 日仏二国間共同研究「日仏二社会の珪肺・アスベスト疾患—空間的マッピングと人文学的研究」チーム：松田毅(神戸大学) 村山武彦(早稲田大学)・

毛利一平((財)労働科学研究所) 中谷友樹(立命館大学)

・「日仏二社会の珪肺・アスベスト疾患—空間的マッピングと人文学的研究」最終報告会

JOBIN, Paul (パリディドロ大学) THOMANN Bernard (フランス国立東洋言語文化学院) LYSIANUK Benjamin (ソルボンヌ大学)

第41回 講演会「文化横断的に哲学すること—台湾で哲学・美学を教えながら」

(Transcultural Philosophizing Now: Teaching Philosophy and Aesthetics in Taiwan)

：マティアス・オーベルト(台湾・国立中山大学准教授)

第42回 講演会「テロスとしての「自己変容」と哲学の可能性—ヨーロッパと中国の出会いの場から考える」

“Self-transformation and the Ethical Telos: Law Sze-Kwang, Foucault and Husserl” (自己変容と倫理的テロス：勞思光、フーコー、フッサール)

：Kwok-ying LAU (劉國英) (香港中文大学教授)

第43回 研究報告会

「シモン・ドントにおける「個体化」概念—現代フランス哲学の最前線—」藤井千佳世(東京大学大学院人文社会研

究科・学術振興会特別研究員 PD)

第 44 回 公開セミナー「バタイユにおける“悪”——教育人間学の観点から——」

宮崎康子（神戸女学院大学非常勤講師）

第 45 回 倫理創成フォーラム

「地震災害とアスベスト問題——阪神淡路・東日本大震災の経験と現状から」

「地震災害とアスベストリスク 報告と討議」

①「東北大震災 現地調査報告」

（中皮腫・じん肺・アスベストセンター 永倉冬史・飯田勝泰）

②「東北の被災地における瓦礫処理の実態について」

（神戸市環境保全指導課 笠原敏夫）

③「解体・瓦礫撤去に伴うアスベスト飛散の危険性と対策」

（NPO 法人東京労働安全衛生センター外山尚紀）

④「マスクプロジェクト」趣旨説明（ひょうご労働安全衛生センター）

⑤プロモーションビデオ映像の試写と紹介（神戸大学院生）

⑥防塵マスクの講習・フィッティングテスト体験（株式会社重松）

⑦マンガ「石の綿 パイロット版」発表（京都精華大学）

⑧震災とアスベスト被害者を悼むレクイエム演奏

・平成 24 年 (2012 年) 度

第 46 回 比較哲学連続研究会 グラハム・パークス教授（ユニヴァーシティ・コレッジ・コーク／アイルランド）を迎えて

“Heidegger and Nishitani on Nature and Technology”（ハイデッガーと西谷啓治—自然とテクノロジーをめぐって）

“Awe and Humility in the Face of Things: Somatic Practice in East-Asian Philosophies “

（「もの」を前にしての畏敬と謙讓 東アジアの哲学における身体的実践）

第 47 回 比較哲学連続研究会 ジン・Y・パーク（眞瑛朴）先生を迎えて

“Ethics of Tension: A Buddhist-Postmodern Ethical Paradigm（“緊張”の倫理—仏教・ポストモダン パラダイム—）

“The Visible and the Invisible: Rethinking Values and Justice from a Buddhist-Postmodern Perspective”

（見えるものと見えないもの／価値と正義—仏教・ポストモダンの観点からの再考）

第 48 回 連続研究会「比較哲学連続研究会ジン・Y・パーク（眞瑛朴）先生を迎えて— “Ethics of Tension: A Buddhist-Postmodern Ethical Paradigm（“緊張”の倫理—仏教—ポストモダン パラダイム—）」

第 49 回 連続研究会「比較哲学連続研究会ジン・Y・パーク（眞瑛朴）先生を迎えて— “The Visible and the Invisible: Rethinking Values and Justice from a Buddhist-Postmodern Perspective”（見えるものと見えないもの／価値と正義—仏教—ポストモダンの観点からの再考—）

第 50 回 フォーラム：マンガ『石の綿』合評会

主催：京都精華大学機能マンガ研究プロジェクト

神戸大学人文学研究科倫理創成プロジェクト

協力：京都国際マンガミュージアム

人文学研究科地域連携センター外部資金受入実績一覧表(H16-H23年度) <つづき>

区分	相手方	教員名	研究題目	16年度		17年度		18年度		19年度		20年度		21年度		22年度		23年度		計
				件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	
委託研究	日本学術振興会	岩崎	多元的共生社会に向けた知の再編(「歴史地の	1,625,000		2,100,000		1,710,000		1,740,000										7,175,000
	国土交通省近畿地方整備局 豊明石塚駅前事務所長	奥村	歴史地域の歴史的景観に関する調査及び活用 についての研究	5,325,000		7,000,000		5,700,000		5,800,000										23,825,000
	生野町	奥村	生野町における近世史に関する調査調査及び 資料の保存活用についての研究	3,400,000		3,400,000		3,400,000		2,992,500										13,192,500
	明石市	奥村	明石市生野町における近世史に関する調査及 び資料の保存活用についての研究	800,000						489,000										800,000
	明石市	奥村	明石市生野町における近世史に関する調査及 び資料の保存活用についての研究																	489,000
	明石市	奥村	明石市生野町における近世史に関する調査及 び資料の保存活用についての研究																	0
	明石市	奥村	明石市生野町における近世史に関する調査及 び資料の保存活用についての研究																	1,400,000
	明石市	奥村	明石市生野町における近世史に関する調査及 び資料の保存活用についての研究																	1,400,000
委託事業	小野市	奥村	若狭原(佐藤)宮内省基金寄附事業			1,500,000														1,500,000
	灘区(役所)		歴史遺産を基としたまちづくり取組む活動～ 地域歴史遺産の活用を目的とした取組			500,000		500,000												1,000,000
大学改革	文部科学省	鈴木	「魅力ある大学院教育」ニシテ「イノベーション」の養成 地域歴史遺産の活用を目的とした取組	11,070,000		13,950,000		13,950,000												38,970,000
	文部科学省	松嶋	交流と地域連携を目的とした「文学教育」 専門職大学院教育推進プログラム～地域			14,298,000		15,576,000												29,874,000
	文部科学省	藤田	を担う地域科高教員の養成～ 大学院教育推進支援プログラム(研究拠点形成			16,745,000		19,700,000												36,445,000
	文部科学省	佐々木	教育推進支援プログラム(研究拠点形成) 語力を教える人文学教育																	5,316,000
科学研究費	一般			37	61,700,000	36	89,000,000	34	78,800,000	35	84,000,000	36	60,889,359	40	77,730,696	42	86,550,000			538,664,054
補助金	分担金受入 日本学術振興会特別 研究員									13	4,805,480	22	6,672,040	27	8,323,180					19,800,700
奨学特別金				7	3,600,000	6	5,850,000	4	1,337,000	7	7,700,000	5	9,900,000	9	7,100,000	10	6,400,000			35,900,000

(注) 1. 16～17年度の科学研究費補助金は、不明のため未計上である。また、全額が研究分担者への配分額を含む総額を計上した。
 2. 分担金受入の経費は、学内における教育研究活動に推進経費への拠出額(2)を含む総額を計上した。
 3. 奨学特別金は、瀬川記念学術交流会費及び大学院学生の複写機使用に係る受入額を除く。

金額欄：上段…間接経費
下段…直接経費

24. 10. 26

人文学研究科地域連携センターの事業内容概要 (平成 21 (2009) 年～現在)

大学院人文学研究科(文学部)では、平成 14 年から、「歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業」を開始した。同年 11 月には地域連携研究員制度を創設し、翌年 1 月には、構内に「神戸大学文学部地域連携センター」を設置した(平成 19 年 4 月の文学部改組にもとづき、現在は人文学研究科地域連携センターと改称)。

これは阪神・淡路大震災以来の地域貢献活動を踏まえ、大学が県内各地の歴史資料の保全・活用や歴史遺産を活かしたまちづくりを、自治体や地域住民と連携して支援していくことを目的とした事業である。これまでの 10 年間の個別事業概要は以下の通りである。

(1) 歴史文化をめぐる地域連携協議会の開催

■関係者との交流と信頼関係を築くため毎年年度末に協議会を開催している。過去 4 年間の一覧は以下の通りである。

- 1.平成 21 年度・第 8 回・平成 22 年 1 月 31 日
 ■テーマ「震災から 15 年 ―地域歴史資料の現在―」
 49 機関 89 名参加
 - 2.平成 22 年度・第 9 回・平成 23 年 1 月 30 日
 ■テーマ「地域歴史文化を担う人材像を考える」
 48 機関 80 名参加
 - 3.平成 23 年度・第 10 回・平成 24 年 1 月 29 日
 ■テーマ「地域歴史文化の形成と災害資料」
 38 機関 67 名参加
 - 4.平成 24 年度・第 11 回・平成 25 年 2 月 2 日
 ■テーマ「地域史を調べることで学ぶこと ―目的と支援を問い直す―」
 - 4.平成 25 年度・第 12 回・平成 26 年 2 月 2 日
 ■テーマ「地域歴史遺産の可能性を考える」
 - 4.平成 26 年度・第 13 回・平成 27 年 1 月 31 日
 ■テーマ「改めて地域歴史遺産を問い直す」
 44 機関 79 名参加
- (※)開催地はすべて神戸大学にて開催。

(2) 地域づくり支援と自治体史の編纂

■神戸市

○大学協定にもとづく灘区との連携事業(平成 16 年度～現在)・・・神戸大学・灘区まちづくりチャレンジ事業助成金にもとづく 2 回(「水道筋周辺地域のむかし」「摩耶道のとおり村の歴史」)の関係資料調査および講演会を開催した。

○神戸市文書館(都市問題研究所)との連携事業(平成 18 年度～現在)・・・レファレンス業務の充実化と未整理史料の整理・目録作りを進め、歴史資料にもとづく展示会を開催した。

- ①平成 21 年度・テーマ「鹿島秀麿と明治の神戸」
- ②平成 22 年度・テーマ「兵庫運河のあゆみ―八尾家文書を中心に―」
- ③平成 23 年度・テーマ「近代神戸の風景―レファート写真コレクション―」
- ④平成 24 年度・テーマ「戦時下に起こった阪神大水害」

○神戸を中心とする文献資料所在確認調査(平成 14 年度～現在)・・・神戸市内の未掌握の財産区を単位とした歴史資料の確認調査を進め、それにもとづき地元展示会やパンフレット等を作成した。

○住吉学園(住吉財産区)との連携事業(平成 21 年度～現在)・・・横田家文書神社関連資料の基礎的調査を行い、資料館だよりの刊行に協力した。

○神戸市東灘区御影石町木村酒造との連携事業(平成 16 年度～現在)・・・木村家文書の仮整理・調査事業の終了。

○神戸元町商店街連合会(みなと元町タウン協議会)との連携・・・本学教員を介する要請にもとづき、元町商店街の言われや西国街道と関わりについて記す、歴史モニュメント設立への協力。モニュメントの文面作成を行い、平成 21 年 12 月 21 日に完成・公開した。それ以降、地元経済団体主催の講演会への支援を行っている。

○淡河町での連携事業(平成 14 年度～現在)・・・淡河町内の歴史資料の調査や豊臣秀吉関連の歴史資料(高札)を発見した。

○神戸市水産会主催「いかなごぐぎ煮認定試験」への協力(平成 20 年度～平成 22 年度)・・・受験者配布用テキストおよび問題作成に協力した。

■大学協定にもとづく小野市との連携事業（平成 17 年度～現在）

○小野市内の歴史資料の共同分析の成果を、小野市立好古館での展示会にて公表した。また、青野原収容所の関連資料にもとづく演奏会等の開催（小野市・東京都・オーストリアウィーン）に協力した。

■大学協定にもとづく朝来市との連携事業（平成 15 年度～現在）

○生野町内の古文書調査の活用研究と、あさご古文書初級教室の開催と「資料集」刊行に向けた共同の準備作業を進めている。

■人文学研究科との協定にもとづく丹波市での連携事業（平成 19 年度～現在）

○合併前の旧 6 町を単位にした歴史資料調査およびその成果を市民講座で公表し、ブックレットを刊行した。

○春日町棚原地区との連携事業（平成 17 年度～現在）

地区内資料の基礎的調査の実施し、研究成果をもとづきブックレットを刊行した。

■伊丹市（平成 15 年度～現在）

○伊丹市立博物館と連携して、市内の歴史資料の調査し、展示会、講演会を開催した。また、震災関連資料を収集・分析し、それにもとづき『伊丹市史』の編集に協力した。

■尼崎市（平成 14 年度～現在）

○富松地区の市民団体の活動を支援して、ホームページ上のバーチャル博物館をオープンした。また、尼崎市立地域研究史料館の史料検索システム構築に向けた支援や、市制 90 周年の際には、協力して歴史展を開催した。そのほか、市史編さん関連者を中心にした研究会の開催している。

■三木市（平成 21 年度～現在）

○リニューアルされた旧玉置家住宅に残されていた歴史資料の整理・調査を市民団体とともに進め、連続講座を開催している。また、学生向き古文書演習を同市協力のもと開催した。

■三田市（平成 15 年度～現在）

○同市史編纂事業に協力し、市内の歴史資料の整理調査をおこない、詳細目録を刊行した。また、同市史編集室と連携して県立高校での歴史研究入門に講師を派遣し、開催に協力した。

■明石市（平成 23 年度～現在）

○兵庫県立図書館と明石市教育委員会からの依頼にもとづき旧明石藩家老家文書の整理調査活動を続けている。その成果にもとづく企画展を開催した。また、市内の歴史遺産マップ作成に向けた事業にオブザーバー参加している。

■たつの市（平成 14 年度～現在）

○『新宮町史』史料編刊行後、市民と協力して収集・整理した歴史資料の調査研究会を継続的に開催し、研究成果の刊行予定している。また、平成 23 年 5 月の台風被害によって発見された大庄屋八瀬家の襖の下張り文書の保全・調査活動にもとづき市民向けの古文書講座を開催している。

■高砂市（平成 23 年度～現在）

○文化財審議委員に任命されたスタッフが市の文化財行政について審議している。

■篠山市（平成 23 年度～現在）

○市立中央図書館の開催する歴史資料整理サポーター養成講座を支援している。また、学生向け古文書演習を同市協力のもと開催している。

■佐用町との連携（平成 22 年度～現在）

○教育委員会と佐用郡地域史研究会の取り組む「平成 22～24 年度・地域の文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」（文化庁）の一環として開かれる「地域資料の取扱い学習会」へ講師を派遣し協力している。

■福崎町との連携事業（平成 19 年度～現在）

○大庄屋三木家の歴史資料を調査し、初心者向けの古文書講座の開催に協力している。また、歴史民俗資料館の開催する企画展やリーフレットの作成に協力し、研究成果を刊行している。

■猪名川町との連携事業（平成 20 年度～現在）

○リバグレス猪名川歴史講座の開催へ協力している。

■自治体史の編纂事業

- 『播磨新宮町史』…史料編Ⅰ 古代・中世・近世と近現代編の刊行に協力した。
- 『三田市史』…通史編1（前近代）、2（近現代）の刊行に協力した。
- 『香寺町史 村の歴史』…通史編、通史資料編の刊行。収集した歴史資料の活用に向けての協議している。
- 『新修神戸市史』…歴史編Ⅱ 古代・中世の刊行に協力した。

(3) 被災資料と歴史資料の保全・活用事業

- 歴史資料ネットワークへの協力・支援（平成14年度～現在）
- 大規模自然災害発生時の歴史資料の救済・保全活動へ協力している。

■石川準吉古文書の整理事業（平成22年度～現在）

朝来市生野町に関連する石川準吉文書（東京都と神奈川県に所蔵）の整理・調査をおこなっている。

(4) 阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会

- (S) 科研グループの主催する「地域歴史資料学研究会」への協力している（平成21年度～現在）。

(5) 地域歴史遺産の活用をはかる人材養成（学生・院生教育）

- 現代GP「地域歴史遺産の活用を図る地域リーダーの養成」事業（平成16年度～平成18年度）の成果にもとづいて開講された大学院人文学研究科「共通教育科目」へ授業提供している（平成19年度～現在）。
- 地域歴史遺産保全活用基礎論A、B（平成19年度～現在）…地域歴史遺産の保全・活用のための基礎的講義（リレー形式。前後期とも金曜1限に開催）
- 地域歴史遺産保全活用演習…連携先の自治体で実施している。
- 地域歴史遺産活用企画演習…市民とともに地域文献史料の活用を図る専門的知識を得るための実践的演習を開催している。

■教員養成GP「地域文化を担う地歴科高校教員の養成」事業を定着させる活動（平成20年度～現在）

- 「地歴科教育論」の開講（前期）、御影高校と連携した地域をテーマとした課題学習を支援している。

(6) 科学研究費助成金・基盤研究(S)「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」の研究支援

- 科学研究の基盤研究組織として研究分析を支援。東日本大震災等に対応した実践的な調査活動を支援してきた。（平成21年度～平成25年度）

(7) 科学研究費助成金・基盤研究(S)「災害文化形成を担う地域歴史資料学の確立—東日本大震災を踏まえて」の研究支援

- 前年度までの上記科学研究を発展・継承する形で研究分析を支援。東日本大震災後の新たな課題（津波、放射能被害など）及び海溝型地震への対応をされに進め、「災害文化」形成に資する地域歴史資料学を確立することを目的とする。（平成25年度～）

(8) 特別研究「地域歴史遺産保全活用教育研究を基軸とした地域歴史文化育成支援拠点の整備」事業

- 社会人向けの養成講座「まちづくり歴史遺産活用講座」試行プログラムを実施している。また、歴史資料目録群データ作成に向けた研究会と兵庫県下での基礎的調査の実施し、フォーラムを開催した。（平成22年度～平成24年度）

(9) 神戸大学附属図書館との連携

- 附属図書館所蔵の貴重書庫の文書を整理し、目録データベースの公開している（平成16年度～現在）。

(10) 地域連携研究とスタッフによる調査研究

- 地域連携センター発行の学術年報『LINK 一地域・大学・文化』（1号～6号）の刊行。
- センタースタッフによる科研調査研究のほか個別の講演会等。

- 人文学研究科地域連携センター TEL 078-803-5566 <http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~area-c/>